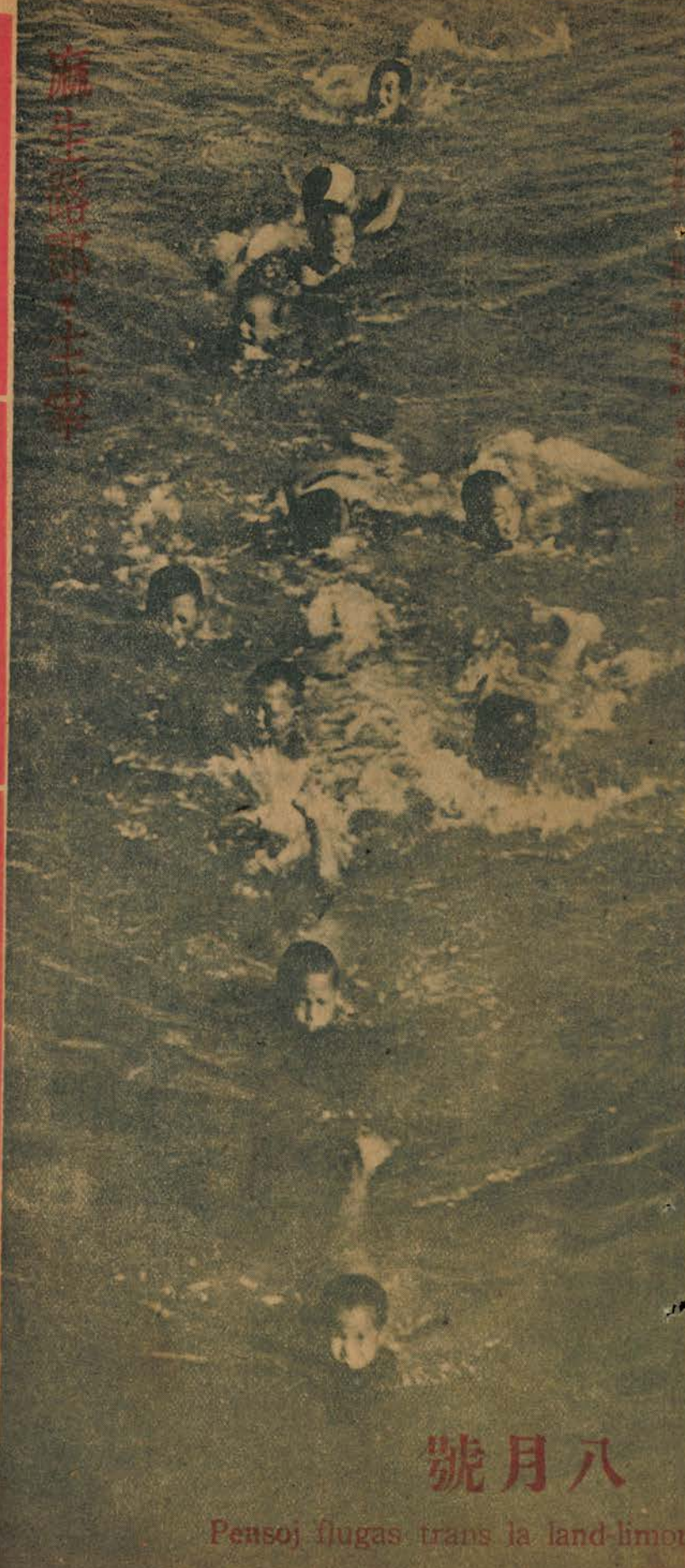
世界の雑誌



八月號

Pensoj flugas trans la land-limon

ニキビ

りとびきに

美顔水

蚤・蚊・南京虫等の毒虫で困ユカいる時！

然ういふ時にも不思議なほどよく効きますので、殊に小さいお子方のある御家庭などには殊の外重寶がられてゐます。

★ニキビ吹出物に非常によく効くので大評判の藥です。ニキビや吹出物でお困りの方に大きな喜びの糧！ ゼヒお勸したい藥です！

是	吹	ニ
非	出	キ
此	物	ビ
藥	に	・

東京・大阪

桃谷順天館

一家言

一列

一列に並らべと云へば並らばない。並らばないから並らべといふ。

一列に並らぶなと云へば並らぶ。並らぶから並らぶなといふ。

並べと云つても並らばないのは意固地で並らばないのではない。並らぶなと云つても並らぶのも意固地で並らぶのではない

並らびたくても、並らべない並らぶまいと思つても並らばねばなられないといふ、それぞれに云ひ分を包藏してゐる。

政治はそれを力で左右しようとするが、その原因が本能に根ざしてゐる經濟的な動きだと、政治の力を反撥して無力にしてしまう。しかし、かゝる理論を超越するところに日本精神の躍動がある。

カストーカ　ムーゲスマリあ風の朝に　（題家口・岩崎柳路）　撮影　福井哲

左横書

國語審議會で漢字左書案が滿場一致で可決されたがすぐ實踐されそうにもない案である。漢字を左横書にしなければ月給が貰へないといふ人達から先づ實踐させられそうである。

私に云はせると從來必要なだけは左横書が行はれて來たやうに思ふ。必要以上に左横書をさせる理由はない筈だ。左右併用は混亂するといふがそれは頭の問題である。ものによつて、右であるところに左であるところに妙味があることも知らねばならぬ。驛名なども横書にするから左右が問題になるのである。縱に書けば一目瞭然で何等不便はない。切符なども横長にするから、横書にしなければならないのだ。同じ寸法の縱長にすれば、それも解決はつく。こんなことは日本古來の習慣を尊重するに限ぎる。要は實踐出來そうにもないことを提案したり、決議したりして輕蔑されない方が賢明であろう。

字音假名遣ひ

同じく國語審議會で可決した案ではあるが、字音假名遣ひ整理案の方なら賛成出來る。尤もこの案が出來たために、從來のものを、みんな忘れていゝのだと便利だが、そうはいかないので、便利になつたと云つて無闇にうれしがるにはあたらないがしかし國民學校低學年の兒童たちは大いに助かるだらうし、これから新に日本語を學ばねばならぬ東亞共榮圏内の人たちにとつては、忽ち役立つであろう。

川柳と字音假名遣ひとの關係について云へば、社會一般の使用によつて、他の短詩型に率先して浸潤して來ると見ていゝだろう。（路郎）

不朽洞句抄

麻生路郎

モラエス忌に（七句）

日本通信誰に遠慮もないモ翁

夕凪へモ翁はひとりつくねんと

莫盆變哲もなくモ翁座し

寢臺を辭して眉山に樂しめり

モ翁又散歩の後姿見せ

カレンダーの下に親日葡人の死

モラエスへ世はつれなくも墓で揉め

畫賛

すぐ意見しに來る叔父もいける口

川柳雜誌　八月號目次

表紙（バタバタ組）福井哲撮影……

一家言……麻生　路郎……（一）

川柳寫眞（集團美）撮影福井哲・句—岩崎柳路……（二）

川柳の近代識　大和篇（六）……麻生　路郎……（二）

雜筆　ペンで泳ぐ……

（其の一）白面人・豆秋

（其の二）柳次・綠之助・葵・山雨樓・竹莊・みどり葉・夜主・牛休・白峯・美奈子・梨光……（二三）

（其の三）波瀾造・湧三・形水・水車・紫音・石鹿・綠葉……（二四）

（其の四）三鶴・雅美・孤蓬・鮎美・文庫・東魚……（二五）

武玉川五篇研究（三）……梅本森蛭子

草木徒然……西田　蟬樂……（二三）

初等川柳講座（七）……麻生　路郎……（二四）

隨筆丹波の尻叩き……小山　文三……（二四）

川柳世界史（一六）……戸田　孤蓬……（二）

貯金雜筆　あの手この手……墨山東魚……（四）

（其の一）柳秀・五健・春林坊……（二四）

（其の二）梨光・宵明・雅美・竹莊・永客・牛休・富與史

（其の三）昌坊・白峯・一笑……（二五）

（其の四）女三・丹路・牛蟲・永車・九天・抱逸……（二五）

浸宵花語……安川久留美……（二二）

★

不朽洞句抄……麻生　路郎……（一）

近作柳稿……麻生路郎選……（二六）

川柳塔……麻生路郎選……（六）

同舟近詠……諸　家……（二四）

一路實印……須崎豆秋選……（二八）

葉校長……西尾　栞選……（二九）

各地柳壇……（三二）

川協・柳界展望……（二九）　廻轉椅子……（三〇）

社關係の人々……（三六）

川柳の近畿 大和篇（六）

麻生路郎

十一面觀世音（聖林寺）

（一八）鬼の俎・鬼の雪隱

橘寺驛から東十二丁のところ、橘街道の上下に二個の奇石がある。街道の上方にあるのを鬼の俎、下方にあるのを鬼の雪隱と呼んでゐるが、鬼の俎は石槨の底臺で、鬼の雪隱をその上に覆うたものであり、もとは一體の石槨なのである。ところが自然の變位で覆石が下方に轉落して、二個の奇石となつたので、霧ケ峰に棲んでゐた鬼が人や獸をこの俎で料理して食ひ、下の雪隱で用を足してゐたのだといふ傳說がうまれたのである。こゝには欽明天皇御陵陪の木標が建つてゐるが、鬼の俎は高市村野口に、鬼の雪隱は阪合村大字平田に屬してゐる。

★鬼の俎と鬼の雪隱を詠んだ現代の句。

俎と雪隱それで事が足り　アート

（一九）多武峰（談山神社）

★談山神社は櫻井驛から南へ五十町、多武峰村御破裂山の山腹にある別格官幣社で、花の名所、紅葉の名所として知られてゐる。櫻井の驛前からバスの便もある。

★維新前には妙樂寺又は護國院多武峰寺と稱へた女人禁制の宮寺で、祭祀は一切僧侶の手で行はれてゐた。石の鳥居をのぞいては一つとしてお社らしくないのはそれがためである。

★明治元年三月、神佛分離が行はれた際、多武峰も當局の慫慂によつて、寺を廢して神社とし、二年二月には衆徒一同が還俗して神官となつた。時の勢ひとは云ひながらなか〳〵の騷ぎだつたに違ひない。

談山神社が別格官幣社に列格したのはそれから五年も經つた明治七年十二月廿二日のことである。

★祭神は大化の功臣、大織冠藤原鎌足である。鎌足の亡くなつたのは天智天皇八年十月で、次子不比等がそれを攝津の阿威山に葬つた。ところが、求法のため渡唐してゐた長子定慧上人が天武天皇の白鳳七年に歸朝して、遺骸を多武峰に移葬し、墓上に十三重塔を建てゝ父の冥福を祈つた。この塔婆の樣式は唐の清涼山寶池院の塔婆を模したもので、その南に三間四面の講堂を建造して妙樂寺と號した。文武天皇の大寶元年に塔の東に方三丈の聖靈院を建て近江の彫工高男丸の造つた鎌足の靈像を安置した。この妙樂寺中の聖靈院の發展したのが談山神社であるから一般の神社に比して異色のあることもうなづけやう。

★定慧上人が鎌足の墓にこの地を特に選んだのは地勢の勝ぐれてゐるのにもよるが、父鎌足が逆臣蘇我入鹿を誅する謀議に參與したとき中大兄皇子とこの山で大事を相談されたといふのに起因するのである。談山（たんざん）即ち多武峰の名の起原もそこにあるのである。

★ある古書に「鎌足の像は近江の高男丸といふ異人の作で、この小像の胸の中には千滿法師の御影が納めてある。萬一天下に凶變が起ると、必ず木像が破裂すると云ひ傳へてゐるが、威靈の恐しさに誰も神殿に入つて直接像を拜んだ者がない。ではどうして破裂を知るかと云へば廟の前に大きな松の樹があつて、その樹から頻りに樹脂を吹き、枝も又裂ける、それが木像の破裂する兆だそうである。ある時、南都で誰いふとなく、木像破裂の噂が立つたので、ある寺の大和尙が身體を淸淨にして恭しく神前に參り、御帳を開いて木像の肌を撫でて見ると、皮膚が膿裂け、臭氣を放つてゐるので、いそいでその由を朝廷に申上げ、御破裂平癒の宣命をお願ひすると、早速勅使が參向して宣命を讀み上げたので、間もなく元の通りに平癒したといふことである」。といふやうなことが記されてゐる。

★鎌足を葬つた廟山が國家に大事のある毎に鳴動し、聖靈院に祀つてある木像の面や時には脚の方までも破裂して奇瑞をあらはしたことは數十回に及んでゐるのである。その度に寺家から朝廷へ報告し朝廷からは告文使を遣はされて、祈禱奉幣せしめられたのである。同じ氏寺の奈良の興福寺との爭ひにも、御破裂の威力は大したものであつたらしく、それだけにサアといふ時に御破裂を擔ぎ出したといふことも想像される。

★藤原氏は元、中臣氏と云うて天兒屋根命の後裔である。大極殿で逆臣入鹿を誅した鎌足のことを古川柳では

神代からこやねに傳ふ藤かづら

年號の始め鎌にて鹿を斬り

といふやうに詠んでゐるが、何れも佳吟とは云へない。

鎌足へまつ裸にて暇乞や

人鬼だと思ひ龍神だしぬかれ

などは、近松の淨瑠璃「大織

冠」や謠からの取材である。

★林笠翁の「仙臺聞音」には鎌足ヲ鎌子ト書タルコト有レバ鎌足トモ鎌子トモ不レ稱、カマスト稱セシナラン。古ハ魚名ヲ取テ名トセシ人多シト、在滿ガ云シハ如何アラン。其コロカマスト云魚アリヤ否モ不レ考。和名抄ニハカマスハ無シ、他ニ今一ツモ證アラバ、在滿說可取。

とある。なかなか面白い說である。この說はあたつてるかも知れない。

★多武峰の建物は數次、兵火に罹つたが、流石に藤原氏祖先の墓所だけに、その都度再興された。現在の建物で古いのは享祿年間、新らしいのが嘉永年間の建造である。

その壯麗に眼を奪はれる人たちが、關西の日光と呼んでゐるが、事實は德川氏が日光廟をつくる時に範をこゝにとつたのであるから主客轉倒の呼稱だ。

★こゝ談山神社で目にとまるものを擧げると、一の鳥居、丁石、屋形橋、下乘石、摩尼輪塔、燈籠の辻、本殿、拜殿、十三重塔婆、權殿などであらう。國寶としては大威德明王像、露盤、刀劍の三種である。

★多武峰を詠んだ今人の句を次ぎにあげる。

拜殿も櫻も燃える中へ來て　霞乃

此コースも飽いたと皇子おほせられ　同

はかりごと鳥の聲にも油斷せず　同

松風とお答へ申し策を練り　同

今日からは肉も喰べると多武峰　路郎

御破裂に觸れず櫻を觀て歸り　同

足弱が摩尼輪塔へ辿りつき　同

談山神社

聖林寺

★聖林寺は櫻井驛から南へ約十五丁、寺川に架した聖林寺橋を渡つて二丁ほど山路を登つたところにある。

★寺は和銅年間の開基、元祿の末に再興されたもので、明治以前は多武峰寺の境內寺であつた。本尊は子安延命地藏菩薩であるが、客佛の十一面觀世音菩薩のために有名である。この觀音像は大神神社の神宮寺の本尊であつたが明治維新に神佛分離が行はれた際當寺に移されたのである。ところが天平乾漆佛中の傑作であることが知られてから聖林寺の名が世に知られるやうになつた。

★聖林寺を詠んだ今人の句。

涼しさは何處の末寺か峰に立ち　路郎

まろうどの觀音さまで名が高し　同

觀世音浮世の風も知り給ふ　霞乃

安倍文殊

★安倍文殊は櫻井驛から西南十二町、多武峰の本道の西數町のところにある。

★寺の名は崇敬寺、安倍寺ともいふ。大化年間の開基で往時は十五大寺の一つであつたが幾度か火災に罹つたので、今では一坊をあますだけになつた。本尊の文殊菩薩は丹後の切戸と出羽の龜岡のとを併稱して日本三文殊と云はれてゐる。

★本尊は高さ九尺の騎獅像で侍者四體と共に鎌倉期の名工阿彌快慶の作である。何れも國寶である。

★附近には石窟（古墳）が多い。それ等の古墳で西古墳と呼ばれてゐるのが有名である。封土の高さが約四間徑十間の圓墳で玄室の天井を一枚石で覆ひ、石壁の組み方にも意匠を凝らし、石面全部に磨きをかけてゐるなど他に比儔を見ない。

★白山堂は文殊院の境內にある。元白山神社と稱してゐたが大正十二年廢社となり佛堂に編入されたのである。

★安倍の文殊を詠んだ今人の川柳を擧げると、

安倍文殊古墳の方へそれちまひ　路郎

見に來たといふのは智慧もさづからず　霞乃

若櫻神社

★若櫻神社は稚櫻神社とも書き、櫻井驛から南へ數町、大字谷といふところにある。神域も狹いし隨分荒廢してゐる。式內村社で祭神は伊波加利命であるが、稚櫻部氏の祖長眞膳連を祀つたものであるとも云はれてゐる。

★履中天皇の三年十一月に、天皇皇后御船を磐余市磯池にうかべさせられてゐると、みかどの御盞に、時ならぬ櫻のはなびらが落ちて來た。みかどは不思議に思召され、侍臣長眞膳連を召されて、こんな時ならぬ花が何處から散つて來たのか調べて見よと仰せられたので、連はその花を尋ねたところが、掖上の室山に櫻の花が咲いてゐたので、花の枝を獻じた。みかどは大變およろこびになつて宮號を磐余稚櫻宮と稱せられることとなつた。そしてその花を尋ねた長眞膳連の本姓を改め、稚櫻部の造と呼ばれその住居地として櫻井町大字谷の地を御下賜になつた。大字谷のすぐ北側に小字磐舟といふ地名が今なほ殘つてゐるが、この磐舟は磐余市磯池の一部であつたと傳へられてゐる。

★今人の川柳を次に。

花も散るならはみかどのみ盃　霞乃

繪はがきはないかと村社のぞかれる　路郎

武玉川五編研究（三）

梅本塵山
森東魚
蛭子省二

（38）

前帶に成と女房のさくゝ成

東魚＝前帶と云ふ年配になると、さばけて來ると云ふのであらう。

塵山＝年闌けて世馴れて來る女房ぶりであらう。

省二＝その氣輕さ明朗さが、また一種違ふものだ。

（39）

石坂ハ佛の道に急度過

省二＝石坂は石段或は石の轉ろがつて居る坂の謂。さういふ坂をのぼつての佛參は、餘りに急度過ぎる。

東魚＝「急度過き」は、きびし過ぎるの意。嶮しい路をきて、一層有難味を感じると云ふ考へ方もあるがこれは佛をやさしい親しみ深いものと、感じての詠である。

塵山＝壺坂寺の觀音堂とでも云ふやうな所で、「急度」は嚴しいといふ意で、急なと云ふ意ではない。

（40）

筆借りて芭蕉へ投る天の川

省二＝「はせを葉よ梶の葉にだも二星」（舉白）。「思ふこと芭蕉に書ん梶よりも」（蓼太）の類詠がある。投筆で書かん。

東魚＝「芭蕉へ投ける」は、書きなぐる心持ちではあるまいか。

塵山＝七夕の句であるが、投げ筆ではないと思ふ。

省二＝蓼太の句の如く、芭蕉に書んと云ふ意で、筆を借りてが興である。

（41）

鳥邊野見えて遠めかね置

東魚＝遠眼鏡で方々見廻はしてゐるうちに、ふと鳥邊野が視野に入つてしまつた。あゝ緣起でもないとの心持ちで、眼鏡をさし置くと云ふのであらう。

塵山＝贊成。

省二＝「見えて」と書いたが、原本は「見らて」とも讀める。句釋は結局同一のところにはなる。

（42）

たちまち貝の替るらうそく

省二＝男を呪ふ時參り。

東魚＝贊。「忽ち」とある處に凄味を感じる。

塵山＝丑の時參でなくとも、斯る事は有るであらう。

（43）

派の利た名主も死て鹿の聲

東魚＝名望家の名主が死んだ村の淋しさも、折柄の秋になつて一層の哀愁が湧く。村近く鹿の鳴きまる事の尙更らであると云ふ、山近い村の趣であらう。

塵山＝淋しい鹿の聲を聞くにつけても、死亡した名主のことが思ひ出される。

省二＝派振りの利いてゐた名主だから、一層淋しい。

（44）

解けた儘棧敷の帶ハ抱て居る

省二＝締め直しに行つては、見落してしまふ。抱て居るより致方がない。

東魚＝狹い場所なり、幕の切れるのを待ちつつ、解けた帶をかゝえてゐる。何となく艶な氣分がある。

塵山＝「抱て居る」は、外に何とか適切な言語が有りさうに思ふ。

雜筆ペンで泳ぐ（一の其）

學生時代

大阪　石井白面人

夏が來ると何時も思ひ出しては苦笑するつときの話ですが、ある夏の事でした。何しろ暢氣な親の脛齧りの學生時代（いやこの頃の學生は鍛錬だとか練成だとか奉仕だとかで暢氣なんて云へつこありませんが）、夏さへ來ると泳ぎたくて〳〵腕がムヅ〳〵してゐた時分です。海の近くに家を借りたら、朝も晝も晩も泳げるぢやないかと云ふことに着眼して、氣の合つた友人と二人で家を探し廻つたと思つて下さい。ところが海水浴場附近の夏の家賃や間代と來たら物凄いもので、徒らに吃驚するだけでとても學生の身分では手が出ないのです。半ば諦めてゐたところが、懇意になつた貸ボート屋のおつさんが耳寄りなのを紹介して呉れたんです。行つて見ると、部屋が綺麗で廣くて涼しい、食事は先方で拵へて呉れる、それに第一間代が斷然安いと云ふ理想通りの話。人の良さそうなお内儀さんに明日からお願ひしますと約束して、まだいろ〳〵話してゐるうちに友人が便所を借りに行つたんですが、戻つて來た顏の色が眞つ蒼なんです。お内儀さんに氣附かれぬやうに訊くと、兎に角便所へ行つて來いと云ふことなので、不審半分で行きましたが別段何もない部屋へ戻らうとすると七月の末が近いのに襖が三尺ほどしか開いてない部屋があるのです何氣なく覗いて見たら、その部屋が丁度芝居で見る座敷牢になつてゐるぢやないですか。そしてその座敷牢の眞ン中に眞つ裸で、しかも剃り立ての頭をした男が大胡坐で盛んに頭

(45) **寢たうへゝ躍かへりの袖疊**

東魚＝踊つかれて歸つた踊衣裳、ざつと袖疊みにして、寢た上へ置くと云ふので、一寸艶めかしい趣が思はれる。

塵山＝寢たのは母親である歟。

省二＝寢て居る人が他にある場合にもとれるし、又自分が一寸疲を休める爲に寢る横になる、その體の上に袖疊であるから上せるとも解せられる。

(46) **蓮切の時々鎌を覗て見ル**

省二＝寒がゆるんだ時、芽など出さぬ前に切る。仕業に對する一種の寫生。

東魚＝寫生と云ふより、寧ろ香はしい匂ひのしさうな氣もされて、嗅ぎもしてみるだらうと云ふ作者の想像。

塵山＝蓮切自身が嗅ぐのではなくて、他より想像するのである。

(47) **干からびて居る木食の傘**

省二＝木食である位だから、傘など、どうでもよいのであらう。「傘」は句の見つけどころ。

東魚＝雨にさす事も、あまりせぬのであらう。

塵山＝木食の坊主と干からびた傘適切の配合と云ふ可きである。

(48) **桐一葉跡にとつかり穴か明キ**

東魚＝桐一葉落ち初めたと見る間に、忽ち凋落の姿となる。商賣も一寸左り前と見る間に、哀れ沒落の有樣となつたと云ふのであらう。

塵山＝天下の秋を知るなどと、眞面目に云ふよりも、どつかり穴が明いた方が面白い。

省二＝「穴が明き」は卒直にし妙表現し盡して居る。

(49) **桶伏とれハ正直にたつ**

東魚＝桶伏の窮窟な思ひから、やつと逃れたので、他の事に思ひ及ぼす餘裕はなく、先づ暢び〳〵と立ち上る心持ちを、「正直」に立つと表現したのであらう。

塵山＝夜が明けたやうな氣がするであらう。

省二＝桶伏の客に對し、「正直にたつ」は考へた表現だ。

(50) **竹の子ハ盜れてから番を付**

省二＝古川柳の方は「番がつき」。

東魚＝「番がつき」と表現した方が穿ち味が強くなるやうに思ふ。斯ういふ點が川柳と俳諧のイキの違ひかと考へる。

塵山＝「盜れて」と云へば、「番を付け」と云ふ方が正しいと思ふ。

(51) **鳶飛て夏の片田をあいしらい**

東魚＝秋なら雁とお定りの景物があるがとの心持ちが、句の背景にあるのがヤマである。

塵山＝鳶飛戻天、魚躍于淵といふ古語を採つたもの歟。

省二＝お定りでないから「あいしらい」が却て働く。

武玉川五篇研究正誤表（二三二號）

(頁)	(段)	(行)	(誤)	(正)
一〇	一	五	やるせらい	なて
一〇	三	四	しろが	
一〇	四	六	雜い	難

を右左に振つてゐるのです。いや吃驚しましたねえ。すると今まで盛んに頭を振つてゐた大入道が、急に頭を振るのを止めて僕の方を見たのです。その眼の凄いことつたら、全く冷水を浴びたやうに思はずゾォーッとしたですねえ。狼狽てゝ戻つて來ると、早くも樣子を觀てとつたお内儀さんが、別に怖ろしいことはないのです。溫順しいのですから決して心配は要りません。どうぞ明日から來て下さい——と云ふのへ如何返事をしたか、早々に表へ飛び出すと貸ボート屋のおつさんとこへ行くのも忘れて電車の驛まで夢中で走りました。えゝ、それからですか、それからは二人共完全に意氣憎沈して仕舞つて、二度と家を借りるの、部屋を探すのと云はなくなつて、それでも當座は今まで通り誘ひ合つては海へ行きましたが、不思議なもので、その海水浴場へは追々と足が遠ほのいて遂には少しも行かなくなりました。泳ぎぢやないですが、泳ぎに關聯した夏のエピソードとしてこんなのは如何ですかしら。

生きてゐる土左衛門

大阪　須崎豆秋

珊瑚海々戰で沈む母艦から大海原へ投げ出された勇士達が「海ゆかば」を合唱しながら或は「秋の曲」の口尺八を奏でながら、悠然として救援を待つてゐたといふ記事を讀んで實にお恥かしい私の體驗を語らなければならんと思ひます。

それは十餘年前に大濱海水浴場の少し潮の速い所で私はボートから落ちまして、潮を呑んだりケイレンを起しかけたりしながら勇敢にも「淡路島」さして泳いでゐたのを援け船のおつさんに叱られながら引揚げて貰ひ「大濱の土左衛門」として夕刊に載ることだけはヤッと免れました。

そこで若し皆さんもこんな場合に遭遇された際には「海に落ちたら決して泳ぐな」といふ海軍の鐵則通り愛國行進曲でも歌ひながら蛙のやうにポンポン浮いたまゝで援けを待たれる樣に御注意申上げます。

川柳塔

=路郎選=

岩躑躅お不動さまの上に咲き
藤の花の下をしづかに遺族章
遺家族の垣は若葉に圍まれて
痴人愛百合のかほりをもてあそび
損をした夜のそろばんへ莫すふ
水蓮のなかから鮒を釣りあげる
雨の窓阿呆駄羅經をおもひ出し

尼崎 水谷鮎美

雲仙紀行

雲仙の湯にひぐらしの降るやうな
地獄
お糸地獄御飯も炊けそな湯がたぎり
沸泉は爆發せぬものか
心臓な、地獄の谷へ竝ぶ宿
白人の姿見えず食事はタップリ
皿數は外人の居た處と知れ
ゴルフアー無し
ゴルフ場に群れ遊ぶ馬の逞しさ

兵庫縣御影町 西川青美

水天髣髴

落陽に天草灘を見遙るかす
天草の島々
娘子軍の基地は靜かに黄昏るゝ
折しも防諜週間
湯の煙に防諜の文字新らた也

大阪 西田艸樂

英靈へ起立土用の陽が眞上
姉は嫁き弟も征くか毛を染めん
休閑地なすびに水が足りません

尼崎 奥村丹路

うつかりとして子の髪に陽が匂ひ
育兒法は母にまかせて子と遊び
心配があつて子供へふりむかず
疊の上のくらし疊の上に堪へ
母は淺き眠りに耐へて子を護り

芦屋 寺井鋭々

氣がつけば蛙が鳴いてゐた對話
親一人子一人螢籠をつり
螢籠子の眠た眼へつきつける
螢飛べど戀する柄でない女
叔父つひに小言をいふた儘で死に
利子勘定飯食ふ暇もなき如し
みつ豆へつきあはされたお父さん
税務署を出て炎天のアスファルト
ちよこ〳〵と洋裝で來る産婆さん
青美君令嬢結婚
夢のばらうつゝの薔薇が咲きに咲き
仲裁は歩のない方も一寸立て

大阪府高石町 戸田孤篷

高利貸常會ぐらいにまかれない
カナ文字で戀文かけといふのかい

兵庫縣川西町　戸倉普天

食堂で支那から歸つた人と遇ひ
石燈籠これがそれ程貴れますか
ドノ汽車に乘るのかホームの朝鮮人

★

警察病院風景（三句）

大阪　井上湧三

心臓の強さを巡査聞くのなり
檢診に美男の巡査みつけたり
官服を脱げば痩せをり患者なり

畠田司政長官を送る

聖業に殉ずる決意海を越え

印度民衆に與ふ（二句）

いつ迄も何を遠慮か脱ぎ給へ
歸依せよと佛の聲だ、聞えぬか

南方諸民族を謳ふ

親船に曳かせ小舟の涼しけれ
更年期修理の時が來ましたよ

大阪　八竹正柳

登山用の靴だを妻は褒めもせず
エゴイスト目下地球にしがみつき
釘拔いて打つて借家に住み馴れる
敗戰調査やりがひのない仕事だろ
丸刈へふと髪のある癖が出る
切り替へた通り車體は曲り行き
洒落一つ飛ばしたまんま還り來ず
眞白な敷布兵隊さん想ふ

京都　明石柳次

それでなうても暑い子の寢像
箸持つたまゝ地圖のぞく大戰果
嫁き後れきつちり同窓會誌來る
たまに會ふ兄弟にして珠數を持ち
この暑さ男きつちり髪を分け

山口縣小郡町　長野井蛙

田植の目、浴びて散策引返し
この銃後牛さへ不平まだ言はず
火敲きのせめて煙突掃除なと

奉天　吉田水車

久々川雜本社を訪ふ

山と積む雜誌に恩師おもふなり

帝都所感

本門寺こゝも電車の音を聽き
グライダー地にある時はあはれなり
怖いほど氷の溶ける向ひ風
着陸の姿勢のまゝで蠅取紙
親切週間、濟むとたんに荒くなり
特進に還らぬ御靈今榮える

堺　村上角堂

永らへて趣味の延長繪に及び
何も彼も知つての短氣泣かされる
次ぎの間で小言の順を待つてゐる
ガス管が膝を匂うても鰯鍋
赤貧を賣物にして厚釜し
轉業へこの健康が役に立ち
白髪染してパーマーへくたぶれた
一枚はとばして見せる寫眞帖

大阪　福井哲

ふるさとの螢をおもふ目を閉ぢて　大阪　須崎豆秋

朝々を黒枠の無い日とてなく

狂人の目に間が抜けたやつばかり

半ドンやドンタクがあり捗らず

やがてもに犬もトマトが好きになり　ハイラル　宮岡白峯

日本の土もついてる長い靴

母からの手紙も入れたてつかぶと　松本　石曾根民郎

義兄、陸軍司政官となる

熱風に克つ軍劍を佩く司政

燕老ゆ離愁の山は晴れるのみ

一畫の巧みに夏の風來る　大阪　正本水客

金波銀波ふるき言葉と思へども

甲板に並ぶ二人は戀に似る

逆光の船くろ〳〵と追拔けり

中甲板サヨナラと云ふ陽がまぶし

會場は尼寺と云ふ風が吹き

婦人服の不便は定期手に持つて

東京の雜踏などに驚かず　東京動物園

從順な首を水牛みずへ出し

ステツキの古へトマトはしばられる

サーベルをとれば巡査も將棋好き

即時拂氣嫌な顏で出しに來る　豐中　黒川紫香

四つ辻を曲ると上衣ぬいで行き

長期缺勤インキの壺が空になり

ブランコを一押し押して煙草にし　大阪　丸尾潮花

ギター彈く女教師へ夏の月

海鷲に似てあざやかなダイビング

常會へ女全權ばかし居て

左前まだ〳〵見せぬ應接間

旅裝まだ解かず映畫を見に出かけ

ワンピース朝鮮生れとは云はず

カルピスへ若い少尉と奥樣と　大阪　北川春巢

歸還兵料理も出來て困られる

出張の木金金にやせて來る

洗濯石鹼も出張は見逃さず

股のぞき尻をソ聯の方へ向け

浦島を思へと與謝の海は暮れ

働きに來た城崎の湯にあたり　大阪　尾崎方正

ご自慢の人事事件を惹起し

ひね茄子び走りの隅で不貞腐り

うちのをやぢも青春はあつたのさ

口紅の亂れ氣にする十八九

薄物へ下着の模樣派手に浮き

宗祖へ詣る餘裕も出來た有り難さ　伊勢に詣でて

パーマかける辛抱を女もつてゐる

末つ子の團扇の風もたまに來る　大阪　西尾栞

兩端は兩親で守る蚊張の裾
風呂の中で欠伸してゐる幸福よ
目を閉ぢてのみほす水の有難し

滿洲 中原銃人

初年兵入隊

俺に似た奴もゐるなと少尉殿

懷郷

葡萄のごと吾が夢嚙みて捨つべきか

廣島 濱田久米雄

負けてなるものかと夏の陽を避けず
遺骨着く日が迫つてる足袋を買ひ
大戰果ぼやつと勤めては居れず
常會の前觸れ金が要る話

西宮 西川愁水

梅雨空へ誤解のとけぬまゝで去に
諦めぬ知らぬ存せぬ十九の娘
增産の胡瓜へ虫がつきました

大阪 中内翠芳

よく喋べる床屋の唾が顏へ來る
北支から歸へつた甥に髭があり
共販所ブツキラボーの親父居る
悲喜交々出で行く汽車に歸る船
胸割つて見せ度いと云ふ口說きやう
純絹が安いは切符だけのこと
自薦他薦發表されてアツケなし

下關 多田市多樓

ガンジーのいま年などに觸られず
梅雨ですと妻なればこそ念を入れ
好き、きらいなどと銃後を忘れてゐ

饒舌へ或日はスパイつきまとい
眞劍な暮しへ髭を剃り落し
未解決仲居一生されもせず

大牟田 高田抱逸

徳島縣日和佐町 濱田賢次

それぞれに我家があつて夕景色
乘物へ軍歌未練のない歩み
演習の道を櫻に教へられ

大阪 夷一笑

たゞもろた樣に特配よろこばれ
姑のかなしいことにあき目くら
子を抱てきれいな星の下に立ち
水打つて竹の牀几を出して來る
丸刈を今迄せずにいたをろか
早起の朝は涼しいものと知り
墓參り朝から暑い寺屋敷

京城 鈴木石鹿

K鐵業殉難社員合同葬

死花は首相の弔辭に極りぬ
破裂さすことは容易とさとしとき
不幸せ慣れゝば左程苦にならず
赫土の山より知らぬ民もあり
面子より金が大切と仰せられ

昌慶苑にて

拓本にすればと碑石撫でゝ見る
御化粧が過ぎると云はれ辭めて行き
功成りて離鮮する日の空高く
大東亞梁山伯の棲家なく

今治 月原宵明

桐の葉に生きる力を教へられ

慌てるだけ慌てゝ子蟹溝へ落ち
威嚇には餘りに弱き蟹の爪
防衛の爪を擴げたまゝ轢かれ
出世してお國訛りもまたゆかし
雨漏りを夫に頼み添乳する
我を折つて六十過ぎたアツパツパ
同級生母でありたり夏祭
いつにない暑さ頓死を聞いて來る
夭逝へひとりの女現はれし
田草とり悴はジヤバかスマトラか

下關 國弘半休

人形へ着せる衣料の切符持ち
一列の目が花嫁をうつむかせ

西宮 阿萬万的

堀内、竹内兩君の戰死を知る

信じられぬ報にアルバム開いて見
カメラ持つて故郷へ引越す友を訪ふ

尼崎 小林文月

月月火誕生祝もあるものか
要領のよいのが所謂出世をし
濁る世を遁げんと時に思へども

京城 小川恒明

國民兵軍事訓練始まる

敬禮がつい商人の腰になり
無器用な奴で教官根負けし
行軍のやがて田舍の匂ひする

大阪 浪玲之介

樂屋いまスター裸になるところ
忠誠一途さて大臣にして呉れず
轉業の寢言を妻に搖すぶられ
蝶々がやつと渡つた交叉點

長女病篤

注射器に挑む少さき魂哀れ
宮城に羽織の汚れ惜しからず
足踏んで江戸辯耳にはね返る

大阪 德永雅美

オールドミス相合傘にてれもせず
ハイキング子供に無理な道を行き

義弟出征

何日の日かこの歡送がちらつかん

西宮 谷口綠葉

妻のメモ、パン、メリケン粉、干うどん
亡き母の額にとまりし蠅を追ふ
松籟を聞いて、風邪を引いちまひ
休閑地こども遠慮のない批評
休閑地大きな實から盗られてる
放り出され猫のう〳〵と寢てゐます
わらぶきに住んでもみたい徑を行く

大阪 武部香林坊

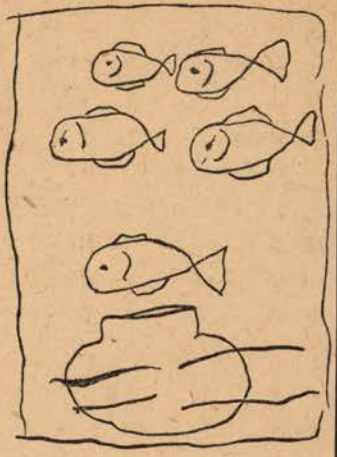
滿洲にて

大陸の月へ鄉愁抱いて寢る
人形のある日本がなつかしい
豚がゐて豐かな村に見えるなり
同胞は杏子の花が咲いて無事
滿洲のえゝしの家は屋根が反り

旅順戰跡巡拜

戰があつたと見えぬいゝ景色
戰蹟の土を拜むでバスに乘り
夕涼み西瓜の皮が流れて來
横着な顏で故障車ひつぱられ
軍刀の手入れへ妻は花を活け
武技成れり第二國民兵として

布施 上田翠光



柳川 世界史 (XVI)

戸田孤篷

(二一) 明史

明の興隆

行く川の流れは絶えずして而も本の水にあらず、さしもの元も萬年の盛大は期し難く明の世となる。

明を興してそのあと釜に坐つたのは朱元璋と云ふ醜怪極りなきあばた面の男。貧家から身を起して小僧、乞食、山賊と云ふ經歷をもつてゐる。黄袍を着ると、それでも漢民族の首領らしく異風俗を排し改革よくつとめた。けれど漢の高祖や我が源頼朝の如く親族功臣を相次いで自らの手に掛けたのは如何なる心理の働きか。はたせるかな、その嬌流を間もなく失ひ、大義名分を說く儒者方孝儒は九族とともに磔にされる。それでも明の前半には鄭和と云ふ名將が出て南進を企て南洋華僑の基礎を作る。

山賊の罪は一等減じられ
眼隱しをして嫁つたのが馬皇后
獻上の目錄にある服飾史
大風の日など太祖は考へず
王道の理窟をいつてちよん切られ

明の衰亡

明は二十代二百九十餘年にして滅亡した。主因の一つに宦官の事がある。男にして男に非ざる宦官、でも大功を樹てゝ來たりすると憎み切るわけにはゆかない。陸から來た比虜の外患には帝王捕虜の記錄も留め海の患は八幡船隊の執拗、長期にわたる侵略に手も足も出なかつた。以毒制毒日本の捕虜に和寇取締りにあたらせた等、氣の毒を通り越した話ものこる。最大の八幡は朝鮮の役、その後ようやく支那から南方にその挺身の進路をすゝめたためやつと明は救はれたが、もうその時は滅亡の寸前であつた。

問題にする問題はとき難く
帝王紀時々包の月にふれ
坊の軍で支那人らしくないスパイ
仕返しは神風だけでほつとけず
太閤の氣性をスパイしてかへる
和寇記といつしよに明は埋められ

明の文化

朱子學と陽明學

先知後行の朱子學は學理の末にこだはり、官學としての保護に醉つてゐた。致知格物の陽明學は習ひつばなしに出來ぬ勇敢な連中によつて唱へられ、且つ實行され、その中心に王陽明が苦勞深い皺の顏をすえてゐた。

松籟の下で朱子學講じられ
石槨を作り眞理がみえはじめ
【註】石槨＝棺の蓋をする函
懸引の講座がほしい大學出
番頭は夜學の暗い灯に座り

文學

何はともあれ日本ではエノケンの孫悟空となり、中國では漫畫映畫鐵扇公主として今日まで人氣のある西遊記が出來た。文章學といふか、八股文と云ふしかつめらしい學問が出來て、試驗、試驗で丸暗記の名人が隨分澤山出たことだらう。

孫悟空に醉へば悟空の顏に似て

美術工藝

南畫と書道、雪舟に味噌の味噌をもつてかへられ大した健筆家あらはれず。永樂帝と景德鎭の名は陶器史に不朽の名を殘す。

繪の樣な字が出來壁をまだみつめ
陶器史の序篇は明のことて盡き

西洋科學の傳來

ゼスイターは遂に御あつらへ向きの出店を澳門にみつける。科學—農本國は曆法を歡迎し時計を珍重する。たゞそれだけで仲々十字架を拜んでくれぬ。一寸伸びては五分ちぢみ、キリスタン禁止は日本だけのことでなかつた。それでも屋臺骨の怪しくなつた支那では外憂の度毎に鐵砲を、大砲を持つてゐるこれら僞平和主義者の必要を拒みきることが出來なかつた。

玉實の價値は時計にかへられる
叡感斜ならず曆の話など
謀略の勝利をマテオ・リツチ書き
禁止してみたが鐵砲ほしくなり

日明貿易

八幡船の外に錢ほしやの足利幕府は明と御機嫌を取つたりとられたりし合つてゐた。只腰拔けの要路に比べて使節その人の中には日本の國威をかゞやかした人も少くなかつた事は記憶されていゝ。尙貿易品としては刀劍、硫黄、銅扇、蒔繪等を輸出し銅錢、書籍、書畫等が輸入された。

大人も和寇になるぞにおじけづき
支那向きの扇を議する扇の座

草木徒然

西田艸樂

置去り草

酢漿といふ雜草は、よく人家の軒下などに生えて、一二寸の葉柄の頂に三個の小葉からなる、嚙めば酸つぱい味がし、可憐な黃色の花をつけ、實が熟すると莢が彈けて小さな種子が四方にばら撒かれる事一種特異で、この草は子供達でもよく知つてゐる。が、ミヤマカタバミ、オホヤマカタバミなぞといふ種類になると、ちよつと素人眼にはカタバミの種類たる事が氣がつかない。外來種の觀賞用栽培種でオギザリス・ローザといふのがある。これは葉が繁茂すると庭一面に擴がり、ちよつと目にはクローバかと思はれる（夜は眠るからクローバーではない）青々とした氣持のよい色を見せてくれる。夏日花軸に數個紫紅色の花をつけて頗る美麗である、俗にオキザリサウと言つてゐる。オキザリス、酢漿科がOxalida ceae、日本の雜草カタバミも、オキザリス、コルニクラタの學名を有ち、オキザリス屬の部類に入り、オキザリスといへばオキザリスローザに限らない譯である。牧野結網博士は、ハナカタバミ、オキザリスの正しい稱へ方を或る本で述べて居られたが、それがどうであつても、私の前栽にはオキザリ草と云つてかまはぬ譯があるのである。

もう十年に近いが、洋種のハナカタバミが先住者が植えたらしいのが今に根が絕へず、年々少しは花を見せる。これは正に先住者の「置去り草」だからである。

酢漿に直して輕い手を通し　古旬

酢漿に油斷のならぬ柳原　古旬

カタバミの紋は、拜領の葵の紋を少し直すと直らぬ事はない。

なげきの泰山木

程近い家主の庭に、此のあたりに稀なる大木の泰山木があつた。あのタラエフか、印度ゴムの木の樣な大きな葉を年中青々と繁茂し、他家の屋根の上まで枝を張つて誠に堂々たる大樹で、毎年六月下旬から、七月一ぱい次ぎ次ぎと、あの眞白い大きな蓮の樣な花をつけ、その香氣が數軒距れた私の家でも香がれてよかつたのであるが、此の木が今年は切倒されて、あの堂々たる樹態も見ねば、花の香もきこえぬ事になつた。大體此の泰山木といふ木はアメリカの原產で、我國へ渡つてから百年は經たぬであらう、木蓮の一種で、マグノリヤ、グランデイホリヤといふが、敵國亞米利加產といふ譯ではないが、切られねばならぬ運命を有つてゐた。昨年家主はその家を人手に渡して新築に移られ、買つた人が改築をし、庭の一部に借家が建つ事になり、どうしても伐らねばならなかつた。買手をさがしたらしいが此の木を他に移すとなると二百圓位の人件費を食ふし、近くの十郎兵衞地藏（阿波十の住家跡といはれる）の庭へ貰つて貰ふ事にも話が出たが、費用の點でこれもついに沙汰やみになつた。で結局祖國の運命を豫言するかのやうに幹の根から伐られ、枝葉は打落されてやがて火に投げ入れられるべき姿となりはて、まことに嘆きの泰山木である。

母子草とは

今年の映畫で人氣を呼んだものに「母子草」がある。ラジオでも放送し、舞臺でも演じ血のつながらぬ母子の淸らかな愛、そして時局をはつきりと認識させた義理人情美は、鑑賞者の人氣を收めた成功作であつた。

が都會人には案外此の題名に選ばれた母子草なるものを知らぬ向があらう。少しく說明して置かう。これも近來やかましく言はれる「科學する心」で……。

はゝこぐさ、此の草はシナリオにも云つてゐる樣にあの映畫の舞臺になつてゐる靜岡縣あたりではちゝつこと云ふらしいが、地方々々で澤山な呼名がある。どんこばな（尾張三河遠江）、もちばな（豐後）、とうご（尾張）、もちぶつ、うぢぶつ（肥前）、ごきようぶつ（筑前）、とのさまよもぎ（紀伊）かはちゝこ（信濃）、こうじばな（上總讚岐）、うじみぐさ（佐渡）、ねばりもち（下野）、もちぐさ（周防）等、

菊科に屬する。秋野分の後はすべての草が枯れて蕭々たる田圃の畔につゝましく苗を生じ、冬を越し、春の陽を受けて漸く繁茂しはじめる。葉は細長く、莖の高さは五六寸が普通全草柔かき白毛をつけて、ちよつと觸れて見たくなる感じである。四月頃稍上に黃色い恰も麴花のやうな花をつける。漢名鼠菊の名の起り、こうじばなと呼ぶ地方のあるのも花からである。

せりなづなすゞなすゞしろ佛の座
御行はこべらこれぞ七草

春の七草の一つ御行とはこの草である、だから食べる草

である。今はよもぎを餅に搗入れるが昔はむしろ此の草を用ひた。糯米を使はぬ團子なぞは粘氣が少くて固めにくいので此の草を入れると粘氣と白毛が團子のつなぎになるのである。つまり壁土のすさの役目をする。後世よもぎが香りがよいので專ら用ひられる樣になつたものである。

で昔此の草を餅に入れた事を歌によつて知ることが出來る。

三日の夜のもちひはくはじ頃はしきけはよどのにはゝこ摘むなり
（後拾遺和歌集）

はゝこつむやよひの月になりぬれば
ひらけぬらしな我宿のもも
（好忠集）

花のさく心もしらず春の野に
はらはらつめるはゝこもちかな
（和泉式部）

君がためやよひになれば夜妻さへ
阿部の市路にはゝこつむなり
（後賴集）

筆者の郷里丹波ではほうこと呼ぶ、ははこの轉訛であらうが、ちゝこといふのは、別にちゝこ草といふものがあつて、全體はよく似てゐるが、はゝこよりは痩型で堅いので草餅には不適當である。

田野有草、俗名母子草、二月始生、莖葉白脆、每屬三月三日、婦女採之、蒸擣之以爲餻、傳爲歲事（文德實錄）

右のうち「二月始生」は當らぬ、秋に既に苗を生ずる事を古人は知らなかつたらしい。

睫く毛むら立ちけり母子草　吾舍

（つゞく）

貯金雑筆

手のこ・手のあ

（一の其）

特殊貯金法

長崎　柳秀

凡そ人間人並の事をして居て「並はづに偉くならう」などゝは、天才的素質をもつて居ない限り凡人には無謀も甚だしい慾望だと平素自ら戒しめて居ります。又その通り人並の生活（衣食住）をし、人並に寢、人並に働き、人並に食べ、世間の義理一つ缺かさずに、思ふだけの貯金が出來るものなら、此の世は全く生きながらの極樂ですがさうは問屋がをろしますまい。

袷衣一枚、眞の「着のみ着のまゝ」で故郷金澤を飛び出し、隱忍自重不撓不屈遂に大阪屈指の富豪家になられた知人O氏の苦心談を父は私の若かりし頃屢々話されました。その一節に「O氏は人さんから物を貰はれた場合、それが鯛であれば焦屋へ、それが砂糖であれば砂糖屋へ、などゝ夫々適當な所へ賣りつけ、斯くして得た金錢をも積み立てゝ今日の富を築き上げられたものだ」と。

蓋し人一倍以上を働くとか、眠る時間たらずに短縮するとか、或は某母娘の如く年が年中何に一つとして食べたい物もろくゝ口にせぬ處か、炭火の費用などの節約の爲め三度三度仕出し屋から運ぶ一人前の辨當を兩人で分け合ひ空腹を我慢するとか、娶するに人間非凡なる「超人的」の生活さへ成し得れば必ずや人並はづれた貯金は出來るものと堅く信じ疑はざる所であります。が私にはまだ其の經驗は有りません。

持久戰

前田　五健

一番たやすくて、一番むつかしいのが貯金なら、一番むつかしくて一番しやすいのも貯金である、そこでいろいろの方法が考へられ實行されて居るが、私の方では、子供に朝禮貯金をやらせて居る、每朝神棚へ拜禮するその時、棚下の竹筒へ一錢宛、朔日と八日には十錢、戰捷ニュース、感激ニュースの時は感謝で十五錢入れる。金額は僅少であるが、二三ヶ月すると相當に成る。ガチャリッ、と入れて、パチパチと拍手する心持ちは又格別である。一錢と十錢に限られて居るのも一戰と實戰で十五錢は銃後戰で、これは子供の貯金の方へ廻す、勿論兵站部はオヤヂの財布から……こゝを大いに研究中で…ソノ持久戰だからですよ。

叔母の伯母

武部香林坊

變つた貯金法なんて凡そ私には緣遠いものである。青年の頃田舍の叔母が私の顏を見る每に貯金せよ貯金せよと云ふので惱ましい時もある位若い私の考へとは少しかけ離れてゐたが、叔母の親切を聞き流してはゐなかつた。しかし幾星霜勤める會社の爲に、又主人の爲に相當利益を上げた私も、自分の儲けとして積極的に考へなかつたから結句人の神となり終つて叔母の言葉を遵奉なし得なかつたわけである。而し事變勃發以來、貯蓄は單なる個人的のものでなくなつた。出來る限り貯金を增やす事に努力するうち知らず知らず自分のものが增えて來た事に樂しみと意義を感じられて來たのである。その叔母の又伯母が私の郷里岡山市東山公園の片はとりに色々なものを商つてゐたが、蓄財に終始した一生で御飯を煮く時必ずその中から一握りの米を減らして別の甕に蓄めて置きやがて金に替へては銀行へ行くのが樂しみだつた。節米と貯蓄とを同時に行つたわけで、昔々の明治時代から昭和十五年の八十二才で死ぬまで殆んど續いたものらしい。

すべてが其樣式でやるのだから女の腕一本で借家を建て別宅が出來銀行でも顏のよいおばさんであつた。それにしても私を養子に望んだがその頃の節米おばさんは僕にとつて何よりの苦手なので斷つてしまつた。しかし人によく慧い人であつて賴まれゝば當時の金で二百圓三百圓と借しげも無く貯金を引出す勇氣もあり、他人にもよく振舞つた。今達者でゐたら定めし貯金報國で一段と腕を振つてゐたであろう。唯今は米の貯蓄など出來ないが家庭のどこからか無駄を省くことに氣をつけたならば色々と面白い貯金が出來ること、思ふ。

初等川柳講座（七）

麻生路郎

穿ちの句に就て

「穿ち」又は「穿ち味」とは、どんなものか――と云ふことを述べやうとすれば勢ひ古句の話をしなければ徹底せぬことになります。何故かと申しますと、古川柳が包藏する穿ち味は量に於ても濃度に於ても遙かに現代の句を淩ぐからであります。古川柳のどの句を見ても、穿ち味の含まれてゐない句はないと思はれるほど穿ちによつて句が構成されてゐるからであります。これを結果から見ますと古川柳を構成するには必ず穿ちを必要としたとも云へるのであります。例へて云へば天麩羅を揚げるのに油を必要とするやうに、穿ち味を必要としたのであります。

尤もこの穿ちの味の面白さに魅力を感じた人々によつて川柳は愛好されたのでありますが、この穿ちの味を理窟ッぽく感じた人々からは非詩的であると云はれて排斥されたのであります。これは刺身の淡白はいいが、鰻の脂ッ濃いのはいやだといふのと同じで穿ちにとつては何んの痛痒も感じない論難に過ぎないのであります。では穿つとか穿ちとか云ふことはどう云ふことかといふところへ、もう一度戻ります。

従來、川柳と云ふものは世態人情の機微を穿つものだと云はれて居りました。ところが、この穿つと云ふ言葉から川柳の三要素の一つに數へられる穿ちと云ふ名詞が出來ました。大體穿ち本來の意味は穿鑿することことほの果）といふ名詞なのでありますが、それとは別個の意味を持つ川柳語彙の穿ちと云ふ名詞が出來たのであります。英語にインサイト（Insight）といふ語がありますが、この語の持つ意味の方が、川柳の穿ちの意味に近いのであります。穿つといふ語を單に穿鑿すると解するところから、理窟ッぽいとか非詩的であるとかの非難の聲も出る譯でありますが、川柳の穿ちといふ語には穿鑿するとか、ほじくるとかの意味はないのであります。寧ろインサイトと同じ意味を持つてゐるのであります。このインサイトの語は、内を見、奥を見、本質を見るといふ意味を持つて居りますので、「川柳は世態人情の機微を穿つ」と云はれてゐる穿つの語と、このインサイトとを置替へて「川柳は世態人情の機微の奥を見るもの、本質を見るもの」と解するのが妥當ではなからふかと思ふのであります。

又、このインサイトといふ語は看破する、洞察するといふ意味を持つて居りますので「川柳は世態人情の機微を看破するものだ、洞察するものだ」と解することも出來やうかと思ふのであります。

又、川柳を評して寸鐵殺人的の詩であるとか、人の肺腑を衝く詩であるとか云はれるのも、穿ちの持つ迫眞力を指してゐるものだと解することが出來るのであります。つまり穿ちはにぎりの山葵の役目を果してゐるのであります。

その山葵の利目は現代句よりも古句の方に濃厚であることは前にも述べた通りであります。

次に示す古句の一句一句から、穿ちとはどんなものであるかと云ふことを抽出いたしませう。

親の闇ただ友達が友達が
婿えらむうち雜兵の手にかゝり
女湯へ起きた起きたと抱いて來る
姑のひなたぼつこは内をむき
張物に嫁は結ばぬ頬かむり
女房のやくほど亭主もてもせず
あの後家の珠數でぶつたは初手のこと
里歸り夫びいきにもうはなし
泣く泣くもよい方を取るかたみわけ
人に物ただやるにさへ上手下手
約束をたがへぬ紺屋哀れなり

「親の闇」の句を一讀いたしますと、人の親と云ふものは誰でも共通的に盲目的な愛情をもつてゐるものだと云ふことをしみ〴〵と感じさせられるのであります。自分ばかりは決して、盲目的な猫可愛がりはしないと、誰でもそう思つてゐるのでありますが、サテとなるとこの本能的な弱點の摘となつてしまうものであります。私たちが、この句を一讀いたしました時に、鈍重な鉈のやうなもので、ガーンと擲ぐられたやうに感じたとすれば、それはこの句の持つ穿ち味に觸れた驚きなのであります。そして句によつてその駭き方もそれ〴〵違うのであります。剃刀のやうな鋭利な刄物を突きつけられてヒヤリとする場合もあります。いづれにしましても、ドキンと胸をうつものがあるのであります。その胸をうつものが即ち穿ちなのであります。そしてその胸をうつ力の强弱は環境の相違、體驗の相違によつて異なるものではありますが、それが人類に共通した哲理である場合の穿ちの迫眞力は頗ぶる高度のものであり、從つてその穿ちは永遠性を持つものであります。

ドキンと胸を打つものの内容は某氏が其の著書で述べてゐられるやうに、必ずしも皮肉に限られた譯ではありません。滑稽である場合もありませうし、矛盾である場合もありませう。要するに穿ちの發生する原因は人情及び非人情の多角形的なあらはれだと思ふのであります。

「婿えらむうち」の句にいたしましても、親としては、あれでもない、これでもないと、選りに選つてゐる譯でありますが、娘の方の性的な芽は用捨なく伸びて、尤も手近なところに落ちついたことを詠んだもので、斯うした事實は世間にいくらもあります。ハツと驚いた時はもうあとの祭であります。そこに穿ちがあるのであります。

「女湯へ」の句も、日常生活で度々目擊するところのものであります。泣く子に對する男親の無力、女親の偉大な力を白日の下に暴露した形であります。斯うした日常生活の中にも、なるほどなるほどとうなづかせるものを持つてゐるので、それを指してよく穿つてゐると云ふのであります。

「姑の」句は、嫁姑の對立に於て、姑は絶えず嫁の行動の監視を怠らないのであります。日向ぼつこをするにしましても、姑は家の方を向ひて居るのであります。この句を素直に讀めば、單に姑が日向ぼつこをしてゐるのに過ぎないのでありますが、この句の裏には嫁姑の對立が脈々として躍動してゐるのであります。その辛辣な觀方に穿ちがあるのであります。

「張物に」の句はいかにも美しい情景が描かれてゐて、そこには何んの穿ち味もないやうでありますが、古句は斯うした句の構成にすら幾分の穿ちをのぞかせ、所謂川柳らしい川柳の仕上げを忘れないのであります。この句から昔の嫁が髪を毀はさないやうにする共通の心理を摑んでゐることを見逃してはならないのであります。

「女房の」の句は、あまりに人口に膾炙してゐる句でありますから、その穿ち味については解説するにも及ばないでせう。寧ろこの句が人口に膾炙したといふそれ自體が穿ちの力であるのであります。この句など何等美辭麗句も並べてゐないし、何んの奇もない表現でありながら、斯くも力強く、人間の心理解剖をしてゐるところに、川柳の威大さを思はされるのであります

「あの後家の」の句は後家としての人間の弱さを思はされます。そしてその影に、ひそかに爪を研いでる好色の僧侶のあることを思はされます。いや、その僧侶も又人間としての弱さを暴露してゐるのであります。これ又なるほど成程とうなづかされるところに穿ちがあるのであります

「里歸り」の句も、かなり有名な句であります。私も昨年、娘を嫁づけ、身をもつてこの句の價値を體驗したのであります。

「泣く泣くも」の句、これこそ人間の弱點を剔抉して餘すところがありません。この句の穿ちなどはおそらく永遠性を持つものだと云へませう

「人に物」の句は處生心理を訓へられる句で、それ以上のものではありません。この穿ちは格言と壁一重の句であります。

「約束を」の句も人間の弱點を暴露したところに穿ちを求めて居ります。

要するに古川柳の多くが持つ穿ちの味はあまりにも强烈であります。幾ら美味探求の人でも、毎日のやうに、牛肉や鰻や天麩羅ばかり喰べさされては飽き飽きするやうに、古川柳のみが持つと云つてもいいほどの獨自性の穿ち味もあまりに强烈に過ぎては、飽かれても又やむを得ないことと思ひますが、食はず嫌ひと云ふ人たちも相當にあらうかと思はれますので、モ少し穿ちについての研究をお薦めしたいのであります。現代句に於きましても穿ちの占めてゐる地域は決して狹くはないのであります。穿ちこそは祖先が川柳人に遺して呉れた唯一の贈物ではないかと思はれるのであります。餘所の花は常に赤く見へるものであります。いたづらに餘所の花に憧れて、自分の持つてゐるものまでも失はないやうにしたいものであります。川柳が今日異色のある短詩であることを强調し得られる重なる要素を分析して見ましたならば、この穿ちの力がそれぞれの句の大部分に浸潤してゐることに心づくだらうと思はれるのであります。從來の川柳に於きまして穿ちといふものは非詩的となり易い障碍を持つてゐるものだと思考される人たちがあるといたしましたなら、それは穿ちそのものの缺點ではなく、表現技巧の拙劣さから來るのでありますから穿ち即非詩的でない證差として表現技巧の研鑽によつて論難の排擊につとめるべきでありませう。要は作家の手腕に俟つ外はないのであります。

次に現代作家の穿ちの句を擧げて、穿ちを研究する人たちの參考に資することといたします。（この項續く）

Sata Special Klinik
呼吸器病科
内科
毎年
日曜
診療
醫學博士 佐多愛彦 電北 38
醫學博士 螺良四郎 電尼崎 1151
加藤謙一
市電堂島中津線終點所北辻西入
佐多醫院
大阪堂島北町 電北八二八四

近作樽柳

選路郎

世辭一つ云はず名醫は聽診器　和歌山　秋月宏方

二重丸君を悼む

たゞ貯金相場欄など知らぬ人　同

僧若く自轉車などを乘り廻し　同

冷房裝置してくれとまで鶏云はず　同

陳列に飾らずとても賣れて行き　同

遺言の家業と別な軍需工　大阪　佐野牛歩

明日からは判取帳に用もなし　同

第二國民兵の訓練始まる

こんな事で戰地へ行けるのかと思ひ　同

雨よ降れ〳〵今日一日は俺も兵　同

國民服第一ボタンだけはづし　同

映畫「婦系圖」を見て

俊藏の惱みの外の上げ花火　尾崎　長谷川三司

片思ひ別な姿でめぐり合ひ　同

眞心で縫ふ針先のはかどらず　同

切れ話貴方本氣と取り合ず　同

遺兒と知る決意も淨き綴方　大牟田　池田有明

子の智慧も慰問袋の中に入れ　同

先生と歩けば理科が地理があり　同

轉業の疲れ勞はる湯がたぎり　同

窓口へ受取る方も脊伸びして　大阪　河南放馬

年のことすぐ云ふ年となりにけり　同

人の持つ包んだ壜は酒に見え　同

辻易者そのローソクの樣な自己　同

便箋の好みを變へず少女病む　京都　中尾春根子

大陸へ征く友と居る川料理　同

横綱は遠く稽古場雨となる　同

啖亂る花をよけ〳〵軍靴行く　滿洲　喜多猪三郎

忙中閑隊長も鍬を入れて居る　同

流れ雲故郷の上はいつの日ぞ　同

人生と忘れる夢の多きこと　大阪　奥村正太郎

南進論どうなされたと友の來る　同

一抹のさびしさ母のない甲種　同

酒癖の方はなか〳〵名が賣れて　西宮　谷口寒草

上役にこびてる氣味の庶務係　同

貯金雑筆 ★ あこの手のこの手 (其の二)

戰果貯金

上田翠光

先ず前以つて敵の戰鬪機は壹圓、重爆弐圓、潜水艦參圓、或は航空母艦や戰艦は拾圓、等と定めて置く。そして輝く皇軍の大戰果が發表されると右の金額に換算して貯金する。擊墜又は擊沈の場合がこれだけで、大中小破は半額、轟沈二割增し、拿捕は倍額、等とするのも面白い。然し第二の眞珠灣や珊瑚海海戰が行はれた場合は、一寸面喰ふかも知れません。

こうして置けば貯金帳其のものが、大東亞戰史として何時迄も殘る。金額は身分に應じて適當に定めれば良いでせう。

變つた貯金法

月原宵明

「返信貯金」手紙を受取つた度に返信を失禮して切手代で貯めやうと云ふ不精者には持つて來いの貯金です。

「行水貯金」暑い時に限る樣ですが例へば大人二人子供三人の家庭の餘湯代三十錢を貯めると相當なものです。尙水で四季を通じると大きな額となる。

錬成・名吟

德永雅美

都會人は交通機關が便利になるに從

消ゴムのちびるに似たる生活にて　同
咲けば散る　自然現象が　淋しいの　大阪　橋本美奈子
たまさかに唄へば陽氣のせいにされ　同
大戰果　御燈明の奥の　彌陀如來　同　小坂ふじ彌
いれずみを撫て　淋しい　夜の捕虜　京都
駄目です　と金の力に　負けてゐる　同
家族主義　社長の服も　油じみ　同　中井白影子
臨檢簿　巡査になつて　日が淺し　京都
デング熱　なんの　總攻撃となる　同
團服に　古き船場の　殼も脱け　同　富岡　巨人
むつつり屋　表彰狀が　二枚有り　大阪
手から手へ　卵の如く　兒をわたし　同
獰猛な　顏の　皇軍慰問隊　同
才能を信じ切つてる二階借　大阪　森川　九一
物思ひ　暇あるせいに　されるなり　同
ソーダ水飲めば　散歩は　歸りかけ　同
趣味のない男は　牛の樣に生き　尼崎　渡邊　正二
詩集讀む女の指は細かりき　同
母の愛　だけでは足らぬ　歳になり　同
飲ませると聞いた電話もメモの端　布施　原田　輝親
御出勤　一人歩けば　處女のやう　同

砂糖特配

特配をする程　倉庫物があり　同
十八時などと驛員夕餉にし　大阪　木下　幽王
若い者で片附けられておさまらず　同
マネキン（夜のデパート蚊がとまり　同
鐵道の官舍のトマト　よく熟れて　拾路　小川靜觀堂
釣り上げるところを見せぬ汽車の窓　同
大阪（着くまで）ワイシヤツ脱いどこう　同
廢物とまでは　ゆかない　年となる　朝鮮　高原惡源太

内地離れて住めば

本籍を　入れて　名刺をすらせたり　同
本土空襲

一見にしかず　ガツチリ隣組　同
事務所まで　スチームハンマ響くなり　大阪　桝岡　詩朗
眞晝間　グリコの函が　落てゐた　同
監視臺　世相の裏も　見えるとこ　同

母子草

母だけを　思ふけなげな　子に育ち　大阪　新川　博也
大阪で　露命つないだ　夜店出し　同
鏡臺へ　立つ　軍服の　擧手の禮　同
お洗濯だけしに行つて上げるわよ　大阪　恩賀　紀川
荒っぽい戰車クレヨンで描いてゐる　同
ラツシュアワーもう火葬場の煙立ち　同
警戒警報　父は　參謀本部なり　神戸　平川　久枝
生み出せばと胸算用で鷄の餌　同
扇子またきれいな嘘にひらかれる　同
浦公英の　鄕愁深く　摘みもせず　滿洲　西垣　錦風
演藝會だけに人氣の　兵も有り　同
演習地　寢返りうたせ　螢消ゆ　松本　岩井　汗青
息吹き傳ふ　手綱短かく　山を降り　同

米國

效能書の　藥が效かず　責められる　津山　粟井　蛙柳

重慶

負け方も　流石面子が　立つて居り　同
太閤の　支那語　六十過ぎてから　東京　岡部　士節
子の勤務　親爺何だか　知らぬなり　同
姑娘の　手紙　七言律の　戀　海州　山形　愚坊
小偸（セウトウ）も　話せばたゞの　人であり　同

（小偸とは小盜土匪のうちで規模小さく小さい百姓家をおそつたりゆすりなどをするもの）

趣味のスタンプ

水谷竹莊

趣味と實益を兼ねた最も理想的な旅行貯金は如何です、例へば奈良の郵便局で五十錢貯金する。そこで立派な記念スタンプが一つ、その次は京都、その次は伊勢、その次は……かうして旅行の先々で五十錢なり一圓なり貯金するその度に變つたスタンプをあつめる酒用なり出張で旅へ出た時又は遊びに行つた時に知らぬ間にどん〳〵貯金が殖えて行く譯です。

貯金法惡質

正本水客

喫茶店で向ひ合つてゐた中年の紳士一錢玉を二つチン〳〵と置いて立上つたが、いかにも眞面目な顏をして歸つてきて曰く「夕刊と間違へとつた」こんなのは御勸め出來る貯金法ではありません。

つて足が痛くなる。そこで厚生省あゝりから歩け歩け、近い所は歩いて六錢貯金、夜一寸遠い所へ自動車を飛ばしたい所を電車で我慢して四十四錢貯金貯めたお金も利子の手を引いて萬兩峠までチヨキン〳〵歩け歩け。〳〵

端た金笑ふたお方がさきに泣き

川柳人には名吟貯金は如何です。平拔一句十錢、佳句一句十五錢、人二十錢、地三十錢、天五十錢と云ふやうに各自境遇に應じて額をお定めになつては如何です。勿論句會吟、募集句、川柳塔、近作柳樽を問はず全部です。

結局は繪ハガキだけの土産物　大阪　山田青々子
縁談は妹にあり適齢期　同　中西　彌生
新婚へアノー奥さんと隣組　大阪　同
箆臺の上で書いてる慰問文

二重橋

彌榮の祈りが咽喉をつまらせる　大阪　大鶴　喜由

博物館

拝みてのない佛像は見上げられ　奈良縣　小谷華素兒
演習のやうだとビルマ線を征く　同
南洋から一飛び事務の報告に　大阪　井上　無陀
見下せばガラス模様の海だつた　同
緞帳も戰ひ抜こう大東亞　大阪　西岡　佳春
古いのであてにならねど案内記　同
救命具こいつ確かに浮くのかね　松江　岡崎　祥月
看護婦の手を妻の手と思ひけり　同
エトランゼ大阪辯とすれちがひ　大阪　中北　正朗
毎月の妻の雜誌を買つていに　同
年寄の出たあと毒なものを喰べ　諏訪　牛山　臥牛
悪質の方が規則を振廻し　同
貧富三代なしあんな祖先の碑　大牟田　上田柳戀子
物賣と話が續く故郷なまり　同
腕時計戰死の時刻知らしてる　大阪　中野　延枝
燒捨てる便りもなくてなほつかれ　同
煙草吸ふたびそれだけで伏眼がち　大阪　宮田　不二
もう一つ梯子が欲しい隣組　同
配給所近所へインキ買ひに來る

職場を辭せるS子へ

辭せる娘の愛せし薔薇も窓のごみ　長野　堀内　敏郎
愛憎限りなく空椅子へ感ず　同
警報へゲートルしかと卷き直す　大阪　内田　掬夫
蚊帳つつて去年の匂ひなつかしい　同
朧月別莊地帶續くなり　松江　恒松　叮紅
餌の事でもめて鶏どうする氣　同
今日からは揉手のいらぬ作業服　上田市　佐久間信治
南方へ雄飛の出來る診斷書　同
純綿の話船場のド眞中　尼崎　江口　正路
長男に生れお經もならわされ　同
附合で着いて來た方がいける口　大阪　石本腦薄留
そろばんを習ひ始めてけちになり　同
捕虜として瀬戸内海の波にゆれ　大阪　松浦　帆船
古本屋の聖書はほこり浴びてゐた　同
ガンヂーの啖呵へ孔雀ひろげたり　大阪　有馬　千斗
卒業のその後スタイルブツクなり　同
電髪が通れば屋根屋一服し　香川縣　早馬　清富
時の人今日は和服で寫される　同
理想とは儚きものぞ柔葉服　大阪　浪花駒志希
水槽の金魚が死んで銃後無事　同

想出の北支征破

あの岩も抗日文を書いてある　朝鮮　加川　泉泡

半島の街に拾ふ

世の中が嫌やとも見えぬ長ぎせる　同
大掃除女ヤツパリ化粧する　大阪　米田　春童
乳母車今日配給の物を積み　同
眞直ぐな竹も撓つて無事なるを　朝鮮　村野東狂子
燈管へ行儀の悪い足を踏み　同
腕時計ばかり見てゐる待ちぼうけ　朝鮮　上田丸太棒
謀諜だよと友は仲々教へない　同
忘れよと言はんばかりの便りが來　朝鮮　徳永林業子

丸刈貯金

國弘半休

私生活に餘りふれると大抵の場合自慢になつたり不平になつたりするので事變前私はこういつた事項には觸れないことにしてゐましたがどうしてもこの頃は私生活をはつきりさらけ出して置かないといろんな場合損をします。或る日の口頭試問で或試驗官から貯蓄のことについて問はれましたので早速私生活を公開しました。即ち私の内は五人家族で三人が男子、最近「バリカン」を購求して三人の頭髪は妻が丸刈にします。一人五十錢として50×3＝150を郵便貯金にしてゐます、と答へて合格しました。

つもり貯金

飯尾寄與史

飲んだつもり、食べたつもり、觀たつもり、行つたつもり、着たつもり、死んだつもり、すべてこのつもりで行けば二百三十億が三百億でも平氣で積ると思ふね。

甲男「つまらぬ事を云ふなよ

乙男「いや、この心算りで行けばさつと積るよ。

切手貯金

駒井昌坊

僕が七八才頃の事だつたが婆アやから切手貯金といふのを教へられた事があつた。切手貯金と云ふのは既に御承知だろうと思ふが郵便局で用紙を貰ひ

用件を後に廻して 聞くニュース　同
廻覽板 貯めよ〳〵と 廻つて來　豐中　三輪 丘堇
ふと聞けば ずつと以前の 流行歌　同
ヘイカバンザイ部隊最後のキイを打ち　和歌山　北垣 神風
決勝戰敵も圓陣 組んでゐる　同
フラッシュにマイクに首相愈ひなし　鹿中　高山 武士
電髮へ席を讓らぬ講演錄　同
岡釣りのバケツ持つたは近所なり　松江　本庄 稔民
降伏にまだ酒があり彈があり　同
戀人を呼捨てにして拗られる　京都　宮川 春渉
罪人は絶えず巡査が募集され　同

殘業して

淋しさをまぎらす派手なベルトの音　島根縣　田中 弘樓
七年が最古參だと云ふ會社　同
日曜日 おとなしくして使はれる　神戸　市川 治男
理窟云ふ車掌に皆な立ち上り　同
晝の風呂 よくよくみれば 漫才師　大阪　野元 吐空
シチュウとは豚か鯨か酒にむせ　同
女中さん螢の期節忘れてゐ　奈良縣　浦部 文人
在りし日を偲ぶ實印 徽が生え　同
何時入れた仁丹かしら 折鞄　愛媛縣 大洲町　米澤 曉明
おいどこに賣つてる馬糞紙を圍み　同
煎藥を母は 襷のまゝで 服み　大阪　山本 葉光
アリガトウ俘虜サンキュー もつけくれ　同
出せば出る 力も見せぬ 妻の顏　岐阜縣　前田 秋暮
病む身には 精一杯の 花壇なり　同
嫁くと聽く無理な笑顏よ悲しけれ　大阪　澤田 晴春
つはものも看護婦さんに廿えてる　同
保險屋はそない云はんとまあ一つ　兵庫縣 淡路町　中島 笑子

妻と來た大陸、土も笑ふなり　北支　宇敷 桃水
空鑵へ オシツコせいにちと困り　香島　正木 琴舟
子ら畫く 隅に眞赤な 陽が上り　大阪　畑 清柳坊
つくづくと 父の歩みの 老ひ給ふ　豐中　水上瀧太郎
酒をさとうとかへて貰ひぬ　廣島　大山 露斗
自由販賣 賣殘りとは 書いてなし　大阪　八田 鐘生
巧にも 歩行ながらの コンパクト　大阪　泉 いづみ
農繁期 モンペイ穿いて 通院し　津山　中山 一進
生きていた 唯それだけの 軍事便　南滿　河合白外郎
鐘 献納 教會に 喇叭鳴る　朝鮮　松田 幸士
親と子が待つた待たんと將棋さし　大阪　白紀 茶美
兵隊に 醉ふ酒がある國つよし　大阪　谷崎 一昌
い〳〵嫁でありたい 老の肩を揉む　大牟田　濱本 邦夫
點數になつて 遺品を 染めに出し　廣島縣 竹原町　黑本 芳泉
就職は お預けにして 子は召され　廣島　久保田可學
ボーナスを明日に控へて帶を買ひ　戸屋　中原 公子
小さいねと校長さんの家の前　大阪　伊古田伊太古
丸髷もラジオ體操の列に入る　大阪　橋口 松嵐
大原女街のモンペとちと違ひ　尼崎　松岡 雲平
嫁が來てズボンの折目も新らしく　大阪　松永 青雲

中村留藏君の社葬

弔辭未だ 遺族を泣かし 續いてゐ　神戸　湯淺小城子
呼びに來て 父へ助言の 王手飛車　大阪　松岡 照二
科學する 心ミシンを 又こわし　朝鮮　日高 呑神

交通道德强調週間

年甲斐もなく十字路で 注意され　大阪　齋藤 三丸
あゝそうか此處はカフエか笑ほうか　岐阜　市川 周峰
落書きに 子の才能を ふと見附け　大阪府　平川 日向
統制は 大道易者にも 及び　大阪　森 歩牛
車掌サン 鋏の音で ものを言ふ　大阪　島田 一人

砲彈と貯金

宮岡白峯

机の上の火砲彈、何時となく兵隊の貯金彈として使つてゐます。俸給毎に二角、二角入れますと一ヶ年七圓貳拾錢となりました。一週年記念には郵政局へ飛ぶ貯金彈であります。それだけに安心をして砲彈を受けて貰へますでしよ。（一七・七・一二）

一割貯金

夷一笑

酒賣人なら誰でも出來る方法です。その日の賣上げの一割をのけて行くのです。賣上げが多ければ多い程貯金額がふえる譯です。むづかしく考へずにやれば必ず實行出來ます。この方法で金を貯められた人はお知らせ下さい。決して貰せとは申しませんから。

切手を貼つて行つて全部詰まると郵便局で通帳へ總額を記入して臭れる仕組になつてゐた。貼つて行く一枚〳〵がとても樂しみであり、亦嬉れしいものであつた。

幼兒に現金を持たせる事は情操教育上良い事ぢや無いと思ふ。故に三錢四錢等の切手で貯蓄させる事は面白味を味はいつゝ自然に貯蓄心を培養出來て一石二鳥ぢや無いだらうか、と幼時を思ひ出して愚考した次第である。しかし不幸にして此の貯蓄は廢止せられてゐる樣であるが、貯蓄强調の折柄是非復活させてほと思つてゐる。

陰暦五月五日、端午の節句には國により、所によつて、それ〳〵の行事や、風習があつて、今でも其風習の傳はるものが少くはないであらう。

織田信長の幼時には三河國の端午の節句に大勢の子供達と河原に出て石合戰をして遊んだと云ふ事である。恐らく武を尚ぶ三河の國では子供の石合戰が端午の節句の一行事であつた事であらう。

○

筆者の生國丹波では端午の節句にいろ〳〵の風習があつて、今でも其片鱗を殘す處が多いのである。以下述ぶる處は丹波全體の風習ではない。寧ろ丹波の一地方の而も小さな一村のみに傳はる獨特の風習であつて、半里に足らぬ道程の隣り村では又別の習慣がある事を豫め斷つて置きたい。

○

舊暦五月四日の夕刻には藁屋根又は瓦屋根の家の入口に當る軒先に、菖蒲と蓬を一本宛結びつけて、之れを四五寸の間隔を置いて三列に垂れる樣に挿し込むのである。これを菖蒲で屋根を葺くと言ふのである。此の菖蒲と蓬を屋根に挿し込むには、梯子を用ひたり、瓦の隙を探したりする面倒があるので、近頃では菖蒲と蓬を一本宛藁で縛つて屋根の上へ抛り上げて居るのを往々見掛けるのである。

○

次に草刈籠一杯の青草を用意し、この草の上に家族の人數に相當するだけの菖蒲を横たへて置いて戸外に持ち出し翌くる節句の朝の朝露を十分に受ける樣にして置くのである。そして節句の朝には早く起きて、この菖蒲に宿つた朝露を家中揃つてうや〳〵しく嘗め、しやぶつて一同東天にかしこまるのである。

この朝露の味こそ無味清澄であつても、其の菖蒲の舌に觸れる香味は今でも筆者の忘れ得ぬ快感である。

朝露を受けた青草は、家に飼つてある牛に食はせるのである事は申す迄もないのである。畢竟この朝露を嘗めるのは、これに因つて一年中の無病息災を祈つたものであるらしい。

○

端午の節句の前晩は菖蒲の香り高い大束を風呂に浮べて菖蒲湯を沸かすのは、今も昔も變りはないが、飼牛の角から角へ菖蒲の束を十文字に卷きつけて、菖蒲の鉢卷をしてやつたり、二三本の菖蒲をつなぎ合せて子供に鉢卷をさせたり、女の髪に菖蒲の小さいのを結びつけたりなぞするのであつた。

この菖蒲の鉢卷をするのはこれに因つて牛や子供や、女達の病魔を拂ふ禁厭だと傳へられてゐるのである。

○

家では五月四日に柏餅を拵えるのである。普通に柏の葉を用ゐるのであるが、我郷土では柏の葉が少いので、山に入つて野茨の葉を採り集めたり、茗荷の葉を用ひたり、ウドの葉を使つたりする。

そして米の粉の團子に小豆餡を包んだのや、小麥粉に蠶豆の餡を用ひた小麥團子の丸く大きいのなぞ、柏餅と言つても一樣ではないのである。而も農家の事とて、三段か四段重ねの大きな蒸籠で幾代りも〳〵も澤山蒸し上げるのである。そしてこの蒸し上げた柏餅は只に家族のものが、二三日も續いて食ふだけに止まらず、神樣に供へたり、お寺さんや、出入りの家なぞへ重箱に詰めて配り合つて、それ〴〵其出來味を自慢し合ふのであつたし、殊に男兒の初節句を祝つて呉れた先々へは悉く重箱に詰めて柏餅の返禮をするのであるから、其の拵らえる柏餅の量たるや、大變な數に上るのであつた。まして翌る五日の節句の當日には、飼牛にも柏餅を喰べさせるのであるから、其の大量生産も蓋し想像に難くはないのである。

○

端午節の產土の神即ち天滿宮への御供へ物は又近郷に類のない珍しいものであるのである。節句が近づと、村の御當番衆は河邊に叢生する菰草を刈り取つて之を清淨に洗ひしばらく、蔭干して乾燥して置くのである。そして節句の宵にこの乾燥した菰草を以て大きな粽を造るのである。

この粽の中味は普通の粽に見る樣な米團子ではなくて、餅米を蒸して作つた强飯の大きな握り飯を粽の一方の端の方に入れるのである。いよいよ出來上つたこの粽は長さ一尺二三寸、太さ五寸位で、其の强飯を包んだ尖端の膨れた部分は恰度握り拳位の大きさであるし、粽となつた其の形は拳骨を固めた腕の肱に似てゐるし、又昔の竹馬の先に取りつけた馬の首頭の樣な形にも似てゐるので、これを節句の菰馬とも稱へて居るのである。

○

こんな菰馬をこしらへて、

小山文三
柴谷宰二郎畫

本社、末社に大きなヘギに乗せて供へる外に、昔は節句の朝産土の神に詣でる村人の悉くに菰馬の粽一本宛を御當番から、お下りとして頂いて來たものであつたが、世の遷り變りと共に凡三十年位前からこのお下りを廢止してしまつて今では産土の神の御供へだけに止めてゐるのであるのはそれだけセチ辛くなつたとも考へられて一入昔なつかしく思ふのである。

○

端午の節句の前夜は、既婚未婚を問はず、老若を論ぜず凡そ女の解放される日と定めてあつたのは面白い習慣である。即ち一年中で只一回のこの夜は、村の女にとつて最も氣樂な時間を持つ事が許されて、女中さんも、妻女も、娘も、主人や、夫や、父親や、兄さん達に、何の氣兼もなく勝手氣儘に振舞つて差支へなかつたのである。だからと言つて、純朴な田舍の寒村の事であるから、芝居のある筈もなく、今の時代と違つて、映畫や浪速節は素より夢想だも出來ないし、殊に女の事であるから、遊興にふける筈もなく、只久しぶりに、主人や夫に構はず早寢でもするか、柏餅を思ふ存分無遠慮に食べるとか、氣の合つた娘サン同志が集つて夜更くる迄遊ぶ位の解放が許された程度のものであつたらうと思ふ。

端午の節句は往々田舍の田植時の最中で、猫の手も借りたい位の繁忙である。それでもこの日一日に限つては、其の飼牛さへ休ませて、絶對に農耕に使はなかつた事も面白い慣例である。斯樣に婦人、娘、女、牛なぞの所謂弱き者に對し、たとへ一日でも、これが愛護の方策を講じて、この休養の慣例を傳へ、旁々健全な母體を築き上げて、より一層健康な子孫の繁昌を得ん事を念願した先人の用意周到さには全く敬意を表せざるを得ないものがある。

○

端午の節句には節句幟を建てるのである。男兒が生れると、其母親の里方から節句幟を贈つて來る習慣があつた。この幟は一反幟、二反幟、三反幟なぞがあつて、小巾木綿の三丈物で出來たのを一反幟と云ひ二反又は三反を縫ひ合せて二巾又は三巾にしたものを二反幟、三反幟と云ふのである。幟の上部は型の如く其の家の紋所を染め抜き、其の紋のやゝ下の方から最下部迄にかけて八幡太郎だの、武内宿禰だの、阪上田村麿だの武勇勝れた古今の名將の繪が染め抜いてあるのである。この大幟を太い檜の幟竿で、庭前に建てるのであるから、近所隣りの大勢が手傳はなければ到底建てられないのであつた大幟は一本だけのものもあつたし、又二本即ち一對を建てる家もあつた。

又この大幟には其の幟竿の上の方に吹き流しの附いて居るのもあつて互に其の豪勢を競つたものであつたが、明治の末期から追々こんなものが廢れて、その代りに鯉幟りを用ゐる樣になつて、今では都も鄙も變りはないのである。

そして持ち古された昔の大幟は其の儘に夏の日覆になつたり、染め替へられて蒲團の裏地に使つたりして、現在この節句幟が殘つてゐる家は殆んど無い位になつてしまつたのは淋しい氣分がする。

筆者の生國では五月人形を飾つた事を聞かないが、この大幟の代りに座敷幟と言つて床の間に飾る本縮緬製の小さい幟なぞがあつた事を記憶する。

○

斯くて端午の節句は、たとへそれが田植の最中でも村中が業を休んで男兒の立身出世を祝つたのであつたが特にこの日には女の尻叩きと言ふ特異な子供の惡戯があつたのは恐らく其の近鄕にも見

凌宵花語

安川久留美

日常茶飯語で、うつかり間違つた言葉を吐く事がある。彼曰く「熟んだ虫ア潰れたともいつて來ない」、音沙汰かないといふのである。これは「うんだ柿」といふのを慌てた言で、即ち柿を虫と入れ替へたのである。（路郎曰く、大阪では消息を少しもしないのをうんだともつぶれたとも云うて來ないといふ。）

×

僕、錢湯へ行く時、妻を呼んで「オイ、干瓢をくれないか」、妻「エ、かんぺう？」「ウン、いや間違つた。糸瓜の干したのだつた……」干瓢と糸瓜、僕もあはてゝゐた。

×

ガンヂーを聖雄といふ。その昔タゴールを詩聖と稱へた。同じやうでちがつてゐる。乃木さんゐまさば聖將で、森林太郎在世ならば詩聖か、はた又月並の文豪か、例の大本敎の親分は蒙古王ともいはれ、信者から聖師さまとも畏敬された。「聖」といふ文字もお安くない。

×

日盛りに門ののうぜんかつら咲き亂れ、その色朱色にして恰も毒婦の如し。夾竹桃の滿開もその緋毒々しい。夏の花は概ねその感じあるが中に、白い木槿の花はその純白なところ實に「聖」のやうな花である。

×

獨立獨歩し得ない人間に對して「朝顔」といふニックネームを呈する事とした。夕べに萎むからでない、さゝえるものがなくては伸びて行けない弱い草であるからだ。ひよろ〳〵と伸びてもコスモスは竹の杖を要しない。強い性格だ。

ないこの村特有の習慣であつたろうと思ふ。

尻叩きと云ふのは前に述べた節句のコモ馬をほどいて、粽の强飯を食つてしまつたあとへ拳大の石を包むのである。換言すれば强飯の代りに石ころを入れた粽をこしらへるのである。そしてこれを、いたずら盛りの悪童たちが懐に忍ばせて、持つて歩き、行き交ふ娘や、御寮さんや、女中さんや、お内儀さん、老婆なぞその誰れ彼れの差別なく、又其所の容赦なく不意に其の女の尻に向つてこの粽の一撃を喰はすのである。而もこの石入りの尻叩きで、どれ程叩かれても、この日だけは苦情が言へない事になつてゐたのであるし、そして男の尻は叩かれないで、女斗りが叩かれる事になつてゐるから面白いのである。

筆者の幼少の頃なぞ、このコモ馬の尻たゝきを造つて貰つて、ひねもす、女の通りそうな四ツ辻の塀裏なぞに待ち構へて、イヤに發達した田舎娘の大きな臀部に向つて不意打を喰はせて置いて、あとをも見ずに逃げて歸つた事もあるし、うつかりして通りかゝつた實の叔母の尻を叩いて、ひどく脅された事なぞ、思ひ出して苦笑を禁じ得ないのである。

節句の前の晩は女天下の許された事は前に述べた。その代り一夜あけた端午の當日は斯様に女が壓迫されて、男獨り威張る事が許されたのは面白い對照だと思ふのである。

一説には、彌が上にも女の骨盤の發育を促して益々强い男兒を生ましめんとする產兒奬勵の寓意であろうと言ふものもあるのであるが、果してどうであつたか。

○

このコモ馬、即ち粽の中味を喰べてしまつたコモ草を用ひて民藝的な玩具の馬を作る事も今に傳へられてゐるが、六十歳以下の今の村人では、その作り方が判らなくなつてしまつてゐるのは惜しむ可きである。筆者の幼時にはこの玩具を作つて貰ふのを端午の節句の樂しみとしたものであつたのを思ひ出すのである。

○

昔の思ひ出を語るのは、既に其の人の老境に入つた證據だと、さる人が喝破してゐる。そして筆者必ずしも老齢ではない事を自負してゐるが、さりとて壯者を凌ぐ程の潑剌さだとも自惚れてはゐない。只廢れ行く舊習の一端を偲ばんがためにこの稿を草したまでである。（昭一七・六・二六稿）

雜筆

ペンで泳ぐ

（其の二）

蛙を羨む

京都　明石　柳次

自分の入つてゐた中學の近くに海水浴場があるため一年の一學期の試驗は早く切りあげられて毎日泳ぎの訓練に泣かされた。といふのが半月程で眠でも五丁の試驗に合格しないと暑中休暇になつても一週間延期されて蛙の眞似で暮さなければならない。それが眠さに土左衛門の自分は文字通り海水を呑んで〳〵やつと休暇の前日教師に救られながら合格して砂濱に上つたと思ふとたんに尻餅をついて歩けなかつた事を覺えてゐる。その時程蛙を羨しいと思つたことはなかつた。今日少しでも游げるのはその時の苦しかつた御蔭だと喜んでゐる。

仕方なしの成功

出雲　尼　綠之助

神門川の近くで育つた私は、我流の手腕を發揮し相當な河童だつた。小學校の四五年生の頃に溺れる友（今は戰死した勇士）を救ふべく敢然飛び込んだ所、頭からしがみつかれた。こいつには全く閉ゑをつぶしたが、押へられた重みで川底に足が屆いた。そこで止むを得ぬ行動として歩いたら呼吸が止まらぬ中に淺瀬へ到着することが出來た。今少しの處で水も頂戴するし人命救助の英雄にはなつたが、自稱（當時はそう思ふてゐたであらう）水の猛者も投げつける程の呼吸困難と、精神的狼狽ぶりに今でも冷いものを感する。

朝凪へ泳ぐ

大阪　西尾　栞

今年の海へ入つたのは六月十三日の午前五時である。時候としては申分ないが朝が早かつたから少々冷めたいだらうと思つてゐたが、どうして〳〵素晴しい氣持だつた。清々しいと言ふ形容詞は、斯ういふ氣持以外に適發してはならないと思つた。午前五時といふと、一寸物好きな男と思はれるが、實は驚異壯年團の練成會の禊の出來事なのである。大體禊は身を潔く、又は身を殺ぐから出た言葉だそうだが、此頃の南の國のアンデーと軌を一にするものではないかと思ふ。さて三十有餘人の壯年團員が鯉叫びつゝ一歩一歩海水に入つてゆく、そして良い加減の所で肩までつかつて、陸の方にむかつて兩手をしつかと握り合せて、天照大神の御名を奉唱するのであるが、自分はこの朝凪の素晴しさに、トタンに童心にかへつて、再び言ふが童心にかへつたのである。そして沖へ向つて今年の初泳ぎをしたのである。——沖へ行つちやいけません——といふ聲にふりむくと主宰が僕を呼んでゐるのであつた。この話をG先生にすると

禊する身がうか〳〵と泳ぎ出しかと應酬されたのであつた。

泳ぎに就て

横濱　福田山雨樓

泳ぐことは一番理想的な運動である。進化論的に見るならば、人間はもと〳〵動物であつて、最初四ッ足で歩いてゐたのである。從つて人間の內臟機關は四ッ足にかなふやうに出來てゐる。泳ぎは人間を原始の姿に還元する。子供が泳ぎを特によろこぶのも、斯うした本能に根ざしたものがあるからであらう。泳ぎは全身運動である。水に親しむ自然的な行である。健民運動が强調される今日、太平洋、印度洋に大和民族の海洋制覇が實現されやうとしてゐる今日、われ等の關心は海に向けられなければならぬ。國民皆泳は今日の一大指標でなくてはならぬ。川柳でも大いに泳ぎの句を創りたいものである。

泳ぎの手當

大阪　水谷　竹莊

病院で働いて居るから泳ぎの手當を二ッ三ッ。泳ぎを知らぬ人が溺れかけたら頭を後に顔を上向けて深く空氣を吸ひ込むこと。手は水面から出さずに腰につけるか頭の方へ伸ばす、そして救助を待てばよい。呼吸

を淺く手足をバタ〳〵すると忽ち土左衛門と改名。泳いでゐてこぶら返りを起した時は充分空氣を吸つて水の中に沒し手または足の拇指を逆にとり充分に屈伸してから兩手で局部を揉みほぐす。一番大切な事は慌てないこと。岸の近くで溺れた人は綱か竹竿を突き出して救ふこと。泳ぎの速成は腰に繩をつけて深い所へ投げこんで貰う。一寸水を呑んだ位で死ぬ氣遣はない。これが一番効果がある。體に油を塗ると非常に早く泳げる、水の抵抗を少くする爲に船の底に油を塗るのと同じ理窟。泳ぎは何んな人でも一應は心得て置けば萬一の場合役に立つ。

目下游泳中

石川縣　松島みどり葉

浮き方を習うて今年の夏は過ぎ浮上る事だけに一夏の苦勞今二二回練習すれば泳げるのにと思ふ時に海水浴場は閉場となる心殘りた事。人世の泳ぎも思はぬ事に障害ありて溺れぬまでも世渡りの爲一寸の波にもアップ、アップやつて居る。そこで斯く申すみどり葉は、十二才で油に溺れ、十七才で千賀丸で難船、二十二才で土崎河口のボート轉覆、二十四才で軍艦新高の腹もぐり、二十五才で金石沖の遭難漁船に救助されて生還。五度の大水難全く一生懸命に泳いだ。これで水は良く泳いだ事になるが、人世の泳ぎは極めて拙なるもので、彼岸へ如何に泳ぎ着く事ぢややら。

泳げぬ僕

大阪　河野　夜王

忘れもしない去年の八月十二日、奇しくも長女の命日だつた。休閑地開墾に餘念なかつた僕は、ほど近い運河の岸でトンボを追つてゐる子供達の悲鳴に思はず鍬を投げ出して、何事ならんとかけ着て見れば、岸より一間程沖に男の子が水を呑みつゝ斷末魔のもがきをやつてゐる。はつと思つた瞬間僕は前後も忘れて運河中へざぶり。やつとの事に引上げて無事一命は救つたが、岸へ上つてほつとしてから泳ぎは餘り達者でない自分の事を思ひ出しひやりと冷たいものが背筋を走つた。運河の深さが幸ひ肩まで位いでよかつたもの〻萬一もつと深かつたら僕も今頃こんな原稿を書けないに違ひない。

水牛と泳ぐ

ハイラル　宮岡　白峯

戰鬪に疲れた足には一枚の紙さへ捨てたくなるのが常です。或日裝具を水牛の背に乘せて行軍中「休憩」の聲もろ共に草に寢た。厩の連隊へ「出發」の聲で飛び起きた。フト見ると裝具がない。水牛だ、水牛だ。冷汗が流れた。河の眞只中で目を細くしてゐるのが件の水牛だ。生れて始めて泳いだ。水牛の角にすがつて岸に着いた時は敵前上陸以上だつた

（一七・七・一二）

青年と水泳

下關　國弘　半休

オットセイを相手に日曜の午後を或る公園で二男を連れて清遊に出かけました。突然キャアッと言ふ悲鳴がきこえて、時を移さずザブンと云ふ水泳の音がしました。「何事ならん」と數百人の群衆の目は其の物音に集中しました。其の音の主は某醫專の生徒さんでキャアッ!!といつた母親に連れられてゐた三才位の女兒を池中から救命して來ました。投げてやる魚の切り身を池中から拾ひ求めては浮ぶオットセイの水泳がとても迅速で愛嬌があつて子供等の人氣を呼んでゐるのに對しさつきの人命救助が「青年の水泳」に依つて迅速に勇敢にしかも鮮かに成されたことを今尙ほ忘れ得ぬ感激の一つとして私の瞳に殘つてゐます。

金石港

大阪　橋本美奈子

商傑錢屋五兵衛を生んだ私の故郷、金石港は北陸でも古い海水浴場として夏はとても賑ひます。學生の頃はもう泳ぐのに毎日夢中でした。もつとも土左衛門の浮いた日は別でしたが…。屢々中耳炎を起し止めさせられた日は日象さして、渚から巧く泳ぐ友を羨ましく眺めたものです。

命令

布施　上田　翠光

驅海沿線警備の或日連日の暑さに耐え兼ねた兵士が城内のクリークに入つて呑氣そうに泳ぎ初めた。何時の間にか、一人增え二人增えして、到頭鉄湯のラッシュ顏負けの樣な混雜振りになつた。やがて泳ぎ勞れた連中がそろ〳〵出て來たのを見ると何ンと全身水垢に覆はれて茶黑く變色してゐた。翌日水泳禁止命令が通達された事は云ふ迄もない。

急性・慢性
化膿症
丹毒・濕疹・瘭疽
外傷化膿・乳腺炎
扁桃腺炎・中耳炎
蓄膿症・齒槽膿瘍
急性・慢性　淋疾
化膿性　婦人科疾患
…等に對し本劑は內服により化膿菌克服作用を發揮す。從つて、止膿・止痛・解熱を迅速ならしめ、根元的なる治癒を促進せしむ。又、副作用少く應用は安全、容易である。
アルジルア錢
內服短期奏效・病原療法劑
二〇錢
五〇錢
一〇〇錢
製造元
山之內製藥株式會社
東京市日本橋區小舟町二
大阪市東區高麗橋五
OP-16

雑筆 ペンで泳ぐ（其の三）

稽古

堺　橋本波夢造

何でも五ツ六ツの時分俺は銭湯で先づ泳ぐ事を稽古した。午後二時頃母が連れて行つて呉れる。

ガラ〳〵ッ「おいでやアーすッ!!」好矣!!今日も眼の悪い婆アの番臺だぞッ。板塀で母が二言三言喋つてゐる間にもう獨りで裸になつて浴室に飛び込む。しめたッ!!空いてるぞッ。カターンコトーンと桶が板石に當る音が朗かに天井に響く。男湯も空いてゐるらしいが女湯は殊に書間は空いてゐるのがこつちのつけ目だ。早速に練習に取りかゝる。先づ桶を二つ合せて濕手拭で一卷きするとチャーンと浮木の代用品が出來る、湯槽のこちらからそれを抱えてぐゥーと蹴り出る。足をバタ〳〵やる、湯がザアーと溢れてどうやら向ふの端（と云つてもせいゞ〳〵二間位だが）まで泳げる、頗る愉快だ。何度も何度もやる。母が止めると餘計にやる。番臺や三助が時々顔を出す時は止める。又やる。

が蹴り出る勢が強よ過ぎて身體が浮木を乗り越し、足が宙に踊つて逆さまにはまり込み、したたか湯を飲んだ苦しさも、闇雲に足をバタつかせてよそのおばさんを蹴り飛ばしたり、湯をかけたりしてぐつと睨まれたりした事はつきりと今でも覺えてゐる。かなり腕白だつた俺!!

そんな少さい時分からの猛練習（？）にも拘らずせいゞ〳〵蛙泳がやつとの俺は海岸に住んでゐながら海水浴には先づ出かけ事にしてゐる。どうしても子供達に引張り出された時は「海水浴とは字の如く海水に浴するを以て足る」とか何とか云つてせいゞ〳〵胸位の處で浮輪にブラ下つたり、濡れた甲羅を干す位で歸る事にしてゐる。

クロールで鮮やかに泳ぐ十二三の子供を見返りつゝ。

『泳ぎ』に寄す

大阪　井上　湧三

頭から走の爪先まで、いやそれば かりかいろいろと愚者の生活環境のことまでも懇ろに心を碎かねばならぬ醫者の仕事は凡そ世人の想像以上に煩はしいものがある。そこで醫者には細心透徹た頭腦が特に適格要件となつてくるのだが實際には醫者も細々と氣を配り自分にも悔がなく又他からもほんとに危た氣のない診療手腕をみせるまでにはなか〳〵に容易のことではない。假に繊細た神經

同舟近詠

絶景を洗ひ雷遠ざかり　松山　前田五健

さう云へば、さう〳〵瀧の音變り

覗き込む子を手で叱る瀧しぶき

子の喧嘩米英になれ蔣になれ

模型機へ子のあこがれは空と水　金澤　安川久留美

紫陽花が笑つてゐるぞハイキング

平凡な雀凡人起き出づる

油繪の父にすまない悔斗り　朝鮮　池田可宵

臍出して書いた原稿とは知らず

うんと子を産めと言はれて恥らはず

官吏三割南方進出

手が減つて手っ取り早く許可が下り　兵庫縣御影町　長崎柳秀

死ぬ迄をすつたもんだと醫者を呼び

大低に貰へ〳〵は嫁のこと

ピクニツク車中に邪魔な花を提げ

晝風呂に素性の知れる金盥　德島縣穴吹町　姫田夕鐘

製材に暫し話をちよんぎられ

鮎五貫大阪行の釘を打ち

田舍にしてはと小癪な口で握り鮨　出雲　尼綠之助

鯉幟戰捷しきりに到る日の

單機出動燕は空へ吸はれたり

山内凡愚君を悼む

桐散るが如し六月八日午前五時　大和櫻田町　嶋田翠峯

はなたれの小僧もまじる臨時工

もと入れてやらねばならぬ女の子　神戸　潮田明坊

机上論實踐難に突き當り

國策に沿うて屋號も消えてゆき

和尚今日國民服で議席にゐ

紙一枚位と云つたのを叱り

過去帳へ父祖に恥ぢざる名の戰死　名古屋　鈴木可香

火事見舞モンペをはいて來て呉れる

現地除隊口髭のまゝ豚を飼ひ

家族七人抱へ轉業考へる　長野縣須坂町　高峰柳兒

清貧にしても恩師の痛々し

地圖張つて南へ北へ口がすぎ

遺産もう利子に追はれる始末なり　山口縣　三原狂路

錄音になるとも知らず河鹿啼く

家計簿に物品税の額となり

をもち合せてもまた木炭自動車風な踏出しでは患者からも安んじて生命を托されさうもない。

かつて私はこの適性を作らうと魯鈍に鞭をあて、臨床家を志してきたものである。ところがこちらへ移りさて院務を管掌し病院運營の實際に當つてみると、これ迄の此修業がかへつて自分には禍ひするやうに覺え出してきた。それは外でもない、如何に眼こぼしするかが所謂政治の要諦だとすれば今迄の習性が今度は全く逆効果をあげることになつたからである。それこそ診察表が邪魔になり脱いてみたいと思ふ日が何度あつたことか、一人二役、私の泳ぎも亦難いかなである。近頃私は時々別な靴をもつことにした。中味？いふまでもない川柳の草紙である。

思ひ出したやうに蛙の泳ぐなり

時をりは甲羅干す日もあつてよし

うたゝ寐の椅子へ容態聞きにくる

（一七・七・八、大阪警察病院にて）

正吉の思出

大阪　大坂　形水

海邊に育つた正吉は五才になれば板に攝まつて一間ばかりバタバタ泳ぎが出來るやうになつてゐた。ある日、正吉は波打ち際で盥に乘つて、ひとり機嫌よく遊んでゐた。いつまでも遊んでゐた。そして眞赤な太陽が西の空を染めて沈んでゆくまで、漁師の家々から灯がチラホラ洩れてくるまで遊んでゐた。竹の櫂でパチヤ〳〵と水を搔いて盥の舟を操つてゐた正吉には、やがて夕潮が滿ちて來たのも知らない。何時の間にか、かなりの沖まで流されて了つてゐた渚にゐる大人達には盥に乘つた正吉が、危つ氣で、じつとして見てゐられないのだ、――下手に動いて盥が傾けばその儘お陀佛だ。が、正吉はそんな危險も一向懸せずに、只、無心に潮の動きのまゝに流されてゐた――大せい人が集つてきてゐる、皆手を振り上げて叫んでゐる。だが、正吉にはそれは何んだかひとごとのやうだつた。「オーイ！、動いたらアカンよ、ジッとしとれよー、盥が覆るよ！」と、口々に手をあてゝ呼んでゐるのが、淡つすり聞える。ふとおつ母の狼狽てた顏がチラッと翳んだ。一寸法師は、お椀の舟で何處やらのくにまで旅をしたのを知つてゐる正吉には、その時、童話の世界を漂うてゐたのであつた。

誰か此方へ泳いで來るやうだ。フウ〳〵と潮を吐く荒い息が近寄つて來た。源とこのおつさんであつた。盥から水中のおつさんの背中へ移される、瞬間、鹽辛い水がゴクッと喉を通つた。一寸法師になつてゐた正吉は、始めて、おつさんの巨い肩へ夢中にしがみ付いた。おつさんの肩に攝まつて淺瀨へ戻されてゆく正吉には、只、怖いおつ母の顏ばかりが浮んで來るのであつた。

命の恩人

奉天　吉田　水車

私は正式に水練をやつた事がない今では我流でどうやら、太平洋のまん中でない限り泳げる程度であるから泳ぎを論じる資格がないので一つ昔の思ひ出を書かせて頂く。漸く顏を潰けて浮く程度であつた頃の夏、南海濱寺海水浴場で遠淺の關係で少し遠くへ歩いて行ける所があつたので少し出てよい氣になつて遊んだ揚句滿潮時に岸へ歸るさに淺い筈の所がもう背が立たず、遂にアブアブやつた譯である。しかし其處に幸ひ、大人なら背が立つ所と見えて一人の男の人が立つて居たので（たしかにそう思えた）しがみ付いたところ其人が私をいきなり差し上げて岸を目がけて投げてくれたので、背の高くない私でも立てる所へ放られたのでやつとの事で我に歸つた。あの時あの人が居てくれなかつたら救護班の厄介になつて居たに違ひないとしみじみ思ひ、その命の恩人の事を、泳ぎと言ふことにつけて念頭を去らないし夏には殊更思ひ出す。

子供の手前

豐中　黑川　紫香

まづ〳〵泳げない私。或る日子供の手前一寸いゝ所を見せて勢よく淺そうな所へ飛込んだのですが……子供が母親に向つて曰く、「今日お父ちやん川へはまりやはつたんや」

彼の女に救はれた話

京城　鈴木　石鹿

近眼五度の私、その私にも青春時代はありました。あの面相でと笑はれても仕樣がありませぬが、それでも愛人に近い彼女がないでもありませんでした。その愛人と共に東海道は富士を左手に眺める海岸へ出かけたものです。土用浪の烈しい日でした。中學時代の覺えの水練の手並を見せるため、烈しい浪の中に泳ぎ出したのでした。彼女ほうつとり？と見てゐました瞬間、三角浪の一際巨大な奴に私は呑まれたのでした。くる〳〵〳〵と浪にもまれて、やつと浮き上つた時、私は盲目同然の身となつて彼女に救はれてゐました。眼鏡をとられた私は、彼女の親切でやつと宿まで送られたのでしたが……いゝ想ひ出です。彼女は今五人の母です。

國の海

西宮　谷口　綠葉

小學校の頃、紀の川に水練場があつて、俗に水場と呼ばれてゐたが、其處で兎に角生れて初めて泳げる樣にして貰つた。淺い處で足をバタバタさせ、所謂バタバタ組（これは又赤い帽子を被せられてゐたのでアカッポと言ふ有難い形容詞を頂戴してゐた）からやつと十メートルばかり泳げて、宜しいと先生に頭を押へられて青帽のアオッポ組に仲間入りが出來た時はよほど嬉しかつたと見えて家に歸つて赤御飯を炊いて貰つたと記憶してゐます。其後青帽組から白帽組とだんだん泳げる樣になつて行きました。和歌山は和歌浦、磯之浦、水軒濱、荒濱と言ふ樣に手近に淺瀨で水のきれいな濱があつて海水浴場には惠まれて居ます。特に水軒の濱が好きで毎日の樣に泳ぎに行つては歸りはバスを敬遠して芋畑を抜け練兵場を横切つて歸つたものです今の宅は香櫨園濱に近く海水着のまゝで走つて行ける處にあるのですがどうも泳ぐ氣持にならなくて、去年なんか二回位行つた丈です。こちらに參つてかれこれ七年近くなりますが毎年國の海につからないと泳いだ氣がしませんので今年も休暇を貰つて子供のバタバタ組を相手に水軒濱で泳げるのを樂しみにして居ります

福井縣小濱町　村田　眉丈

始球式腰をひねつて市長投げ

髭の濃さ戰闘帽のよく似合ひ

田舍から親父國民服で來る

レントゲン寫眞きりようを惜しまれる

ホルモンに通ふ夫人のあでやかさ

下關　勝谷　山川兒

羽ばたきに似て兵隊の水泳ぎ

鐵兜とんぼとまるによいところ

兵隊の匂ひになつて外泊し

石川縣津幡町　松島　みどり葉

梅雨の窓の蝸牛見て子をあやし

北國の雨つい寢こゑがる癖がつき

貯金雜筆あの手この手（其の三）

貯金の趣味化

兵庫縣　小山　文三

○

一錢を見付け次第占領の意味で貯金箱に投ずるを一戰貯金と云ひ、商家にて其日の最初の賣上高又は純益を得意客の名を書いて貯金するを御得意貯金と言ふ。死線を越へて凱ち五錢以上毎日貯金するを突擊貯金と稱し、錢湯に入浴する毎に十錢と思つて三錢宛貯金するをお風呂貯金と名づけるとかや。

暑いしんどい等唸聲を吐く毎に十錢宛貯金するを何蕪貯金とし、買物の二割、料理をとれば其三割、觀劇其他には五割の貯金をするを贅澤貯金とし、他から何でも戴いたら凡て其の半額を貯金するを御禮貯金と云ひ、自分は勿論一家に寡ばしい事があつたら十錢以上貯金するを喜び貯金と言ふ。

國旗を揚げる度に五十錢宛貯金する處の日の丸貯金や、祖先のめい日に其の日數だけ、例へば十七日なら十七錢とか十七圓とかを貯金する等のめいにち貯金等は既に新聞にも賞めそやされた面白い變つた貯金法である。

○

私の知つてゐる或る小さな呉服屋さんは毎日の賣上高の内から五十錢を天引して貯金してゐるが、開始以來既に十五年、今では思ひもよらぬ高額貯金となつてゐる。

紙屑、古着、屑鐵、古瓶、古新聞古本なぞを賣拂つた金はみな貯金箱に入れて別途の貯金にしてゐる等は堅氣の家庭によくある例で誠にうるはしい情景である。

○

一錢を笑ふ者は一錢に苦しむと言ふ金言から思い付いた譯でもないが昭和十二年末頃からアルミの一錢が出廻りそうになつて來たので國策上銅貨の引上げが急務であろうと考へた私は早速銅貨貯金を始めたのであつた。

そして自分の蟇口に入つた銅貨は決して外へは出さない事にして之れが十錢以上になりさへすれば直ちに到る處、思いついた處の郵便局に預ける事にしたのである。

素より別の郵便貯金通帳を拵へて貰つて毎日此の通帳を持つて歩いた事は勿論であるし、其の蟇口が銅貨で膨れる毎に其の土地、其處の郵便局の窓口に差出す事にしたのであつた。

○

だから今其の無効の判を押した古い貯金通帳の數册を眺めると、新京だの、大連だの、開原だの、鞍山だの、門司、長崎、岡山、神戸、福井金澤、札幌、東京、京都、大阪だのは素よりの事同じ東京でも京橋だの東京驛構内局だの、或は大阪梅田、北濱、難波なぞ各地の郵便局のスタンプがあつて獨り趣味の集印帳の感じが出るのみならず、旅の日誌ともなり又當時の所在、居動の證明ともなつて面白いのである。

○

此の銅貨貯金を初めた當時には私は煙草を喫はなかつたので所謂煙草錢のお釣りの銅貨なんかは手に入れられなかつたが、例へば歸りの電車で讀む夕刊一枚を買ふにしても決して私の蟇口からは銅貨を出さないのみならず、必ず五錢白銅貨を出して二、三錢の銅貨の釣り錢を貰ふ樣に勤めたのであつたが、これ位にしても一ヶ月に八、九十錢、多きは一圓二、三十錢位の銅貨しか貯められなかつたのである。

昭和十四年末頃から煙草を喫み初めたので、こんどは所謂煙草錢のお釣りの銅貨が入つて來る樣になつてそれから後は一ヶ月凡そ百八十枚乃至二〇〇枚位の銅貨貯金が出來る樣になつたし、若し夫れ一週間か十日程の旅行をして極力銅貨の獲得に熱中すると其の月だけは三百枚から四百枚の銅貨が貯金され得るに至つた

こんな事で私の樣な僅かな小遣錢を入れる小さな蟇口に入つて來る銅貨の一ヶ月の總量は少い時で八十枚餘程多くても三百枚内外に過ぎないものである事を確め得られたし、同時に小遣錢を多く使へば使ふ程、銅貨の入つてくる量も正比例的に增加するものだとの確證をつかんだのであつた。

○

今は銅貨は殆んど引き上げられから之を以て私の蟇口にも賑はせ率いて銅貨貯金を累進させる事は出來ないが、それでも茲數年來我が蟇口に入つた一錢銅貨を逃さない事に一種の興味を持つ樣になつてしまつたので今では獨り銅貨と言はず、アルミ貨と言はず又其アルミ一錢の大型と新型とを問はず凡そ一錢貨幣は悉く集めて置いて郵便貯金とする事を繼續してゐるのである。即ち最初の銅貨貯金が今では一錢貯金に變つてしまつてゐる譯だが、恰も戰時だから寧ろ一戰貯金と云ふ方がふさはしいのである。

最近郵便貯金制度が改められて一回五十錢以上でないと預つて貰へないので一錢貨の五十枚溜るまで蟇口に持ち越さなければならない惱みがあるし、特に私にとつてはこれまで程の局のスタンプの集印を頻繁にやる事が出來なくなつた恨みがあるのである。

○

當て、暫く郵便局に持つて行くのを忘れてゐて、古狀袋に溜めて置いた一錢貨凡そ三百七十枚をさる郊外の郵便局の窓口へ雜然と持ち込んだ時の事である。恰も月末の預入れと引出しに大多忙であつたので若い貯金係の局員氏は如何にも面倒臭い樣な目で私を眺めながら

コレから後は五十枚宛包んで來て

呉レ

と嚇く私を叱責するのであつたし、東京〇〇町の郵便局では

あなたはよい趣味を持つて居られます

と冷笑された事もあつて、回顧して苦笑を禁じ得ない事が多い。

○

節約を守つて、浪費を省いての貯金こそ眞の貯蓄の意味がある、今私のやつてゐる叙上の貯金なんかは申さば一錢貨幣の蒐集趣味に墮する嫌ひがないでもないから大方各位に御勸めする譯にも參らぬのである。

然し又貯金を趣味化する事も無駄ではないと考へられるので敢て恥さらしの一文を草した次第である。

（昭一七・七・一一稿）

頒ケ印拜借

尼崎　奥村　丹路

入つたお金は一應まる〳〵銀行なり、郵便局に預ける。預け印は自分のでなく、身のまはりで最も石部金吉的人物の印を拜借する。あとは言あはずとも明らか。

女房と相談をして義理をかき

古川柳

一萬圓を目指して

書法　淼　半壘

約二十年前滿洲在勤時代、住友の山添さんの十年間に一萬圓貯る方法を當時の主任から承聞きした。たしか就職當時一割少くで採用されたつもりで本俸の一割を、次の昇給後は一期宛昇給が遲れたつもりでその昇給額を、賞與は全額を貯金するのだつたと思ふが、餘程しつかりして居

なければ出來ない。然し感心の揚句その方法をプリントして同僚知己に配つた位だからもつと樂な方法だつたかも知れぬが、感心しながら今に一万圓貯めて居ないから矢張り樂な方法ではなかつたのだ。

名案より國策

奉天　吉田　水車

蓄めてから貯金のおもしろ味をよく蓄めた人から聞かされるが最初からおもしろく蓄めるのは餘程修養？を積んだ人でないと一寸難しいやうである。扨ておもしろく貯金する方法と言ふと實は私もそいつを希つて居るがなか〳〵よい思案がない。利殖本位の色々な貯金方法があるけれ共、大體利殖を追及しての貯金なら（私の場合）どうせ知れたものであるし、貯金の本質はそんなものではないだろう。こゝは一つ當今の國策本位となつて「貯める一錢が一つの彈丸」と言ふ心算でやる他はない。そして「貯金は身の爲國の爲」と言ふ標語を書かして頂く。

昇給を○にして

上海　植山　九天

十五年の正月から初めました。現在も其の當時の俸給で暮してゐます其の間の昇給三回をいつも零として貯金に入れてゐます。御陰で家庭至極圓滿。

變つた貯金法

大牟田　高田　抱逸

貯金法ではないが彈丸切手の話で拾壹枚に壹枚の當籤率を破り等級は別として六枚買つて貳枚當りました局では番號順に買つてくれる裏をかいて六回に分けて買つてみたところなんと貳枚當籤しました。毎月つゞけてみます。

雜筆

ペンで泳ぐ

（其の四）

危い達人

大連　佐々木三福

魚でも瀬戸内のものよりも荒海で獲れたものが美味しく、泳ぎも靜かな海で習つた者よりも、荒海で鍛えられた者の方が上手だと言ふ理窟になると、日本海の荒い海に面した土地で育つた私などは、さぞ水泳の達人であらうと貴かぶつて呉れる人が有つたら、穴にも這入りたい位の下手さで有る事を告白せねばならぬ。

私の郷里には河も有り海も有るので五歳位から私は水にはいり、何人に教はるとも無く滅茶苦茶流の泳ぎ方で、少年にしては相當遠い距離迄泳ぐ事が出來るやうになつてゐた。其頃丁度私の郷里にも山陰線が新しく建設される事になり、何港から積出されたものか、トンネル工事用の煉瓦を滿載した七八十噸位の西洋型帆船が數隻私達の海岸に來て沖合遙かに碇泊した。西洋型帆船などと言ふものは其頃迄は繪で見る以外に實物を見た事の無い私達であつたからいたづら盛りの吾々少年が何條じつとしてゐやう、或日の事、よし泳いで見物！と十二三人の悪童共、例の滅茶苦茶流の手亜でザンブと許りに飛び込みどん〳〵帆船目指して泳ぎ出した。さて泳ぎ出して見ると、陸で考えたよりも遙に距離が遠い、泳いでも泳いでも仲々帆船に達しなかつた。然し珍しいもの見たさの元氣が手傳つて、やがて船の近くに達した。驚きの目を見張つて心ゆく許り初めて見る帆船に少年達は充分滿足した。其處迄は上出來であつたが、行きはよいよい歸りは恐はいだ。何しろ何れも少年の事である。帆船に上つて一呼吸入れてから歸路につく事をせず、海中で泳ぎながら見物するだけ見物すると、さあ歸ろう、と陸を目掛けて又泳ぎ出した。歸路の半分も來ると一同の疲勞は其の極に達した。其上都合の悪い事には潮流の加減も加つて一向に陸に進まぬ、其内に自信が無くなる、心細くなる段々と目の前が黑くなるそうな氣持になつて仕舞つた。この離行は私許りでなく、何れも浮きつ沈みつの有樣であつた。

陸上では大騒ぎとなつた事は當然である。私達が正氣ついたのは救助船に引上られて稍暫くたつてからであつたそうな、私の水泳は斯かる歴史つきの上手さである。

山出しと海出し

大阪　德永　雅美

人樣より餘程苦手の多い私にとつて水泳は苦手中の苦手である。私の郷里は福田新田と云つて、つひ祖父の若い頃は海の底であつた。從つて私は云はば山出しでなく海出しであるこれから先の日本國民たる者が泳げないでは濟まん。アナウンサーに德永商張れと云つて貰ろうほどではなくとも、ましてや夏の海水浴が冬期に於ける子供の健康にどんなに影響するかと云ふ事を見聞するに及んで、未來の親爺たるもの吾だ寒心にたえぬ次第である。ところが天の配劑は良くしたもので、愚妻は山出しも山出し、大和の山と山の間から生れたやうな山出しだが、吉野川の急流を何回でも往復しようと云ふ程達者である。そこで親爺はいさゝか意を强うして、他の教育はいざ知らず泳ぎの仕込みは妻に一任すると、今から十年ばかり先の事を頭痛に病んでゐる次第である。

泳げない癖に親爺も裸なり

ボート

大阪　戸田　孤蓬

親に口ごたへする奴は脛つぼしたゝき折るそと心臓の弱い私をおびやかした父からほんとに脛つぼしをたゝき折られかけた話。

小學校五年生の春。蒲柳の質だつた獨り子の私のために、煙の大阪から濱寺の海岸に移つたばかりの時。梅雨晴れの午後。學校から歸つて來て濱に出る。悪友に誘はれてボートに乘る。沖へ漕ぎ出す。岸に漕ぎ還へる。ボートから降り樣とする。彈丸黑子の如く飛んで來る人影。いきなり私に飛びかつて、手にしてゐた棒切れでいやと云ふ程どやしつけられる。有無をいはせず波打際から程導くない家まで引ずつてかへられる門口までくると自分だけ中に入つてびしやんとしめ出される。ワン〳〵泣けるだけ泣いてやつた。母のとりなしでやつとうちに入れてもろう。

『おい、今日西洋料理喰べに行くいふてたな、早う用意せえ』

御機嫌よく親子三人が濱寺公園の中にあつた南海ビヤホールの食卓に坐つてゐた。

『ボートにのつたと聞いて、そつとしたぞ』

たゞそれだけ眞顔でいつた。今から二十何年前の話。その八月から水泳をはじめて秋には二十五丁の発狀をもらつてゐた。

川柳蛙泳ぎ

尼崎　水谷　鮎美

大阪ッ子の小生は蛙泳ぎが得手で水中に約二時間は蛙でゐる事ができるのです。ところが、この蛙、川柳海でも相當に長い期間蛙泳ぎを泳ぎ續けてゐます。岸には柳祖の柳が垂れ下つて、私たちが命がけで飛びつく川柳蛙であることをよろこぶやうです。私たち梅田支部の蛙族は方眠由布、綠葉、三司、治男、吐空、桑坊、紀川、三郎、行春、漬子、一也と小生、其外二十餘名は「いのちある句を創れ」の路郎師に指導を頂く絃川柳人の蕃ぎグループです。

柳心へ合掌かへるの人の影　鮎美

泳げなくて得な男

今治　長野　文庫

釣趣味の人を專門に乘せて、釣のお供をして生活してゐる漁師がある筆者の知つて居る喜作と云ふ男も矢張り此の種の漁師だが、仲々よく繁昌して夏分なんかは數日前から契約して置かないと容易にその舟に乘せて貰へない位だ。別段他の漁師以上にアジロ（魚の澤山居る場所）を知つて居る譯でもなく、又特に喜作の舟が良いのではないのに、妙に人好きのする男で上客が寄り、殊に相當年輩の知名の士がヒーキにするので不思議に思つて居たが、筆者も先日喜作の舟へ乘つた時、始めてその舟の流行る譯が分つた。その譯はその時相客の一人が「この舟に乘つて居れば覆る心配がないから安心だ」とツブやいたので「どうしてですか」と尋ねて見ると、その返答が面白い一體喜作と云ふ男は生れながらの漁師でありながら只の一米も泳ぎの出來ない碇の樣な男である。世人は萬一舟が轉覆した時に「泳ぎの達者な漁師ならすぐ助けて貰れるから安心だ」と思ふかも知れぬが、それは素人考へで釣趣味の人間はこれを別な意味に考へ「泳げない男なれば舟を絶對に覆へさない」と思ふのだ。「あの舟ならば安全だ」との安心感から特に喜作の舟に乘る人も相當あるらしい。大體舟が轉覆する如きは絶對と云つてもよい程稀なものだがそれでもその萬一を怖れる人も多い樣だ。筆者は此の男の事を思ふ度に「泳ぎを一つも知らぬのも案外いゝところがあるものだ」と可笑しくなる。

流儀

北京　森東　魚

小生川柳は柄井流に御座候得共水泳は水府流に御座候　頓首。

昭和千代紙撰集

宮尾しげを編

千代紙板行の權威廣瀬辰五郎氏に千代紙の話を聽取編纂、なほ伊勢辰藏版の中から三十一種の千代紙を撰んで本編成る。素晴らしく華やかな本である。A列5號判（和紙、和綴）非賣品。

募集句

一路集

實印

豆秋選

實印をつくのを女房覗き込み　清富
實印のことから水臭いことになり　正朗
實印は高い利息を知りつくし　千斗
實印を捺す指先にある覺悟　平人
實印を捺すへ期限の念を押し　抱逸
實印を捺す日印肉探してる　神風
實印を妻にあづけて勇み征く　泉泡
實印を捺した後から心配し　雅美
肉親へ押す實印の冷めたすぎ　武士
保證人實印捺すに暇がいり　林葉子
實印をつくり一人前となる　悪源太
實印を押して溜息一つつき　東狂子
代書人實印ですかと眼鏡ごし　錦風
のし掛る樣に實印突いて呉れ　春童
實印の事で本家へ無沙汰がち　駒人
實印と云ふが二代目まで祟り　九坡
實印を親父は持つて死ぬ氣なり　猪三郎
借主は實印ほどの顔でなし　肱水
實印を包み包み包み包む　青雲
實印は未だありません新家庭　昭二
實印は父の訓の黄楊でよし　菱三
實印の文字は讀めなくともよろし　士節
借金に仲々立派な印を捺し　臥牛
實印を押さねばならぬ羽目となり　可學
實印を押すのへ眼鏡かけ直し　彌生
兄貴らしい顔で實印捺して呉れ　さく子
實印は母に伺ひたてゝ捺し　乙平
友情に厚く實印捺してくれ　青々子
三圓の金錢に實印要ると云ふ　方正
實印のこんなとこにも趣味を見せ　翠光
どうなりとなれと實印意地になり　太郎
そうか〳〵と伯父が實印押してくれ　沒食子
貸す方は實印押してほしいなり　矢野
青白き手で實印捺されて居　六龍子
大金庫實印一つ罷り出る　不二
信用をされて實印まかされる　竹莊
實印へ餘り用事の無い暮し　カズヱ
無くなつた實印以外なとこにあり　治男
實印とくらべ辯護士引請ける　敏郎
實印を出せ債券が當つたぞ　みつる
召集令來たか實印グッと捺し　祥月
實印の眼にはつきりと金の高　角堂
實印の一歩手前で考へる　葉光
實印を屆けて人間らしくなり　柳蛙
それからは女房實印かくしとき　一葉
實印も共榮圏の事で要り　春涉
實印を護つて母の國訛り　千斗
實印を押すと紛爭あつけなし　みどり
實印の樣に暮した男なり　詩朗
（佳）實印を押してる母の手がふる〳〵　翠光
（同）財布から出る實印でやすぼく　凡平
（同）代書屋に實印輕くあしらはれ　正朗
（同）實印はくやく〳〵と彫つてある　翠芳
（同）實印を變な處から出して來る　清富
（同）金借りる日の實印を淋しく見　豆秋
（同）實印を並べて會社出來上り
（同）念を入れすぎ實印はさかさなり
（同）何となく實印捺して見たくなり
（同）實印を捺せば半紙と思はれず
（同）捺すものでないと實印子に讓り
（軸）實印が廻覽板に捺されてる

柳界展望

川柳のペーシ

催

▼本社句會は七月四日午後六時半御津八幡宮で開催▼松坂倶樂部麻生路郎川柳講座は五日・十九日午後一時▼有恒倶樂部川柳講座は九日・廿三日午後五時開講▼阪大川柳會は廿四日午後四時▼大阪遞信病院川柳會は十七日午後四時開催▼大阪鐵道病院川柳會では十四日夕刻から創立一周年記念句會を五柳居に於て路郎師出席の下に開催、なほ會員一年間の收穫を蒐めた「柳芽」を當夜會員に頒たれ興をそへられた▼尼崎住友產報川柳會は十日午後七時・廿六日午前十時なほ廿六日は吟行甲陽園へ向はれた▼川雜堺支部では十二日、天見へ吟行、一行は路郎師、儀助、貴志子、波夢遣っまさ子、英二、昌坊、角堂の諸氏、松島別館の一室で句延をひらく、遲れ走せに葭乃女史參加▼川・雜尼崎支部句會は廿日午後六時尼崎昭和莊で開催、水谷鮎美氏出席▼川・雜椋田支部では廿二日午後五時西宮產報會館に於て酒井斗風氏追悼句會を營まれた▼川・雜下關支部では十二日一ノ宮福王寺へ吟行、大阪の正本水客氏小郡の長野井蛙氏（何れも不朽洞會員）等も行動を共にされた▼東帶川柳新京例會は六月十六日に開催、なほ旅行中の佐々木三福氏出席▼川・雜下關支部では二十八日山口縣道々場に於て夏季鍛錬川柳大會を開催

消息

▼七月一日の夜、モラエス同心會主催のモラエス忌が修された。路郎主幹も發起人の一人として出席。不朽洞會員では戸田孤逢氏出席。翌二日午後二時から中外日報社主催のモラエス座談會が開かれ、この會へも路郎主幹出席。▼岩崎柳路氏（不朽洞會員）は蒙彊寫眞聯盟主催蒙彊新聞社後援の懸賞寫眞に第二席一點並びに佳作二點入選の榮を擔はれた▼石會根民郎氏（不朽洞會員）は版畫はがき「思ひ出の松本」を刊行された。川柳は民郎氏、版畫は丸山太郎氏▼森東魚氏（北京）は塘沽の森半麟氏の通信によると胃腸を害し病臥されてゐられた由、氏の健康のためにも、川柳のためにも御自重を祈る。▼濱田久米雄氏（不朽洞會員）は七月五日公用のため播州赤穗御崎へ出張された由。▼川・雜三池染料支部で募集してゐた泰公川柳は六月末日を以て締切り、目下高田拘逸氏（不朽洞會員）の手で編纂中である。▼川柳大陸社では皇軍慰問號を出されることゝなつたので路郎主幹も慰問原稿を執筆された。▼和歌山陸軍赤十字病院の同好川柳會は北垣神風氏の努力で發展しつゝあるが、最近會報を出されるとか、路郎主幹に原稿を依頼された▼勝谷山川兒氏は相變らず元氣で頑張つてゐられる。同氏は六月中旬川・雜松江支部の歡迎句會に臨まれた由。▼湯淺小城子氏（神戸）は七月十九日腦氣のため兵庫縣口大村に向はれ目下同地で保養されてゐる由。▼小川恒明氏（不朽洞會員）は六月末朝鮮へ赴任されたが二十七日京城で鈴木石鹿氏（不朽洞會員）に、邂逅、同氏の案内で朝鮮神宮に參拜された由。

弔

▼酒井斗風氏（不朽洞會員）が七月七日午前二時半他界された。享年三十七才法名釋政敎、闘病中にも作句を怠らず多くの俳吟を遺した。謹んで哀悼の意を表する。▼河野夜王氏（不朽洞會員）の嚴父が七月廿四日逝去された、謹んで悼む。▼關本雅幽氏（大阪）が四月十九日の朝、長逝された。行年四十六、法名は心月宗善信士。氏は川柳雜誌社の舊同人で名作家として知られてゐたが多年の宿痾は遂に起たず謹んで悼む。▼横濱川柳界の耆宿山本斗酒氏（和久三）が七月六日午後四時三十五分永眠された謹んで悼む。▼山内凡愚氏（山口縣）は六月八日逝去された、謹んで悼む。▼篠原春雨氏夫人は五月廿二日病歿された、哀悼の意を表する。

轉居

▼清水友帆氏（不朽洞會員）は大阪市住吉區墨江東五丁目七番地へ▼奥富天作氏（上海）は上海閘北永興路儒林里華社社宅四號へ▼小川恒明氏（不朽洞會員）は京城府永樂町二丁目七番地則武和道方へ▼澤井香月氏（錦州）は奉天市大和區白藥町三〇番地七九ノ一へ▼岡田笛六氏は岡山市下石井錦町一五八片岡敏雄方へ

改號

▼大熊政治氏（大阪）は路郎師によつて柳號を司白と命名された▼大川五郎氏（大阪）は五柳と改號

社の回覽板

★不朽洞會總會準備委員會は七月廿七日午後六時半川・雜本社に於て催された。當夜の出席者は戸倉委員長奥村丹路、黒川紫香、浪玲之介の委員諸氏と石井白面人、岡田某人の兩氏

★不朽洞會新會員發表

大阪府　米本儀助氏（貴志子氏紹介）
兵庫縣　吉田萬雷氏（鋭々氏紹介）
大　阪　福井　哲氏（八歩氏紹介）
同　　松浦帆船氏（玲之介氏紹介）

★春元紀大氏矢野赫堂氏は何れも家事の都合で退會されることゝなつた

校長選

校長の訓示聞えぬまゝ疲れ　詩朗
教へ子と校長祝ひの灯に座り　翠芳
先生が叱られてゐる校長室　數馬
校長が太鼓判押す婿であり　カズヱ
校長が禁酒禁煙やつてみせ　春巣
隱し藝校長さんの番となり　鶏城
言海を繰る校長の眼が疲れ　千斗
校長へ若い後添來るといふ　鶏城
校長は清貧といふ御姿　臥牛
校長が媒酌といふ女教員　信治
校長も優等生は知つてゐる　翠芳
バスのある道校長は歩いて來　數馬
校長はお辭儀の群を縫ふてゆき　カズヱ
校長さんの出るはスプーンレースなり　春巣
校長の口も君が代歌つてゐ　鶏城
校長に灸の効果をきかされる　蛙柳
退職をしても校長で呼ばれてゐ　伊太古
校長を泣かせた彼が殊勲甲　葉光
校長の父と生活してオールドミス　雅美
（佳）補習科のお茶に招ばれた校長さん　猪三郎
（同）校長の添書で投資勸めに來　惡源太
（同）ゆうゆうとラスト校長走つて來　鶏城
（同）校長も子を孫を持つ瞳です　葉
（軸）校長先生様といふ手紙が來

廻★轉★椅★子

▼我等は大日本帝國の名譽にかけて頑張る。――あらゆる立場に於て。

○

▼本號は恒例の特別原稿で飾つた。雜筆「泳ぎ」は國民皆泳を貯金雜筆「あの手・この手」は二百三十億貯金を目指したもの共に寄稿家諸氏の好意と其の勞を多とする。

▼「卿木徒然」は藥劑士西田卿樂氏が、植物・文學の兩觀點から、その蘊蓄を傾けて執筆された好讀物である。

▼隨筆「丹波の尻叩き」に筆者小山文三氏の郷里丹波の一部の習俗で頗ぶる興味の深いものである。柴谷宰二郎畫伯を煩はし繪によつて後人に傳へることとした。

▼「川柳類題索引」の續稿は記事編輯のため次號へ讓つた。

○

▼ことしの暑さは格別で、南洋的な暑さだとも戰線の暑さと變らぬ暑さだとも云はれてゐる。そのためか、どうだか知らぬが、こちらでも、ちよい〳〵南洋ボケしてゐる人たちを見かける。過日も大和のある古い寺を訪ねて、宗旨を聞いたら、「まだ決まりません、華嚴になるか、眞言になるか、何れ近いうちに決まりまつしやろ」とまるで餘所ごとのやうに云つてゐたので呆ッ氣にとられてしまつた。宗教統制の影響らしいが、宗旨によつて統制されるのなら判るが統制で宗旨が決まるやうでは、宗教ではない。これなどは立派な南洋ボケだ。しかし、柳壇にも南洋ボケの一派があるので、そんな寺のあることを笑つてもゐられない。日川協の兄貴分の雀郎が文學報國會の一員にならうとして、とう〳〵俳句の部へ鞍替へしてしまつた。まるで魚釣りに出かけて土左衛門になつた形だ。そのくせ、日川協の人たちを振り返つて、當分俺と一緒に壁にへばりついて立つてゐろ、必ず何んとかして川柳の席を見つけてやるからと印度の反英運動家の樣なゼスチューアーをすると「ホントに席を見つけてくれるのかい。たのむぜ兄貴！」と一同が鎖然として頭を下げる。何處からか「齒を喰ひしばつてゐろ、齒を喰ひしばつてゐろ」といふ聲がする。

しかし、非力な兄貴に、川柳部門をつくる自信のあらう筈もない。既に俳句部に首を突込んだだけでも滿悦してゐるのだ。

「大きな聲では云へぬが俺は俳句部門の第四部でいいと思つてゐるのだ。しかしそれでほみんなが承知すまいから、何んとかすると云つておくより仕方がない」と云ふのが雀郎の肚なのだ。これでは南洋ボケどころの騒ぎではない。川柳文學「番傘」の七月號の表紙に堂々と「日本文學報國會發會式に列して」といふ文字が刷込んであるので、水府も發會式に列したのかと思つてページを繰つて見ると、雀郎が一人出席、それも自分の席がないので、蜘蛛のやうに壁にへばりついてゐたといふ記事で埋められてゐた。私は大和の老僧の言葉を聞いた時よりももつと呆ッ氣にとられた。

これでは「番傘」も俳句文學といふ看板と掛換へる必要があらう。それかあらぬか、交換誌の六月號を送つて來なかつたので、誤達かと思つて社の方から請求させたが、七月號も送つて來なかつたので、なるほど俳誌へ鞍替へした意思表示だつたのかと、今ごろそれに氣づくやうでは、こちら樣もいささか南洋ボケにボケつつあるのかも知れない。

前號本欄で、豫告しておいた通り、この問題の全貌がハッキリしたら大いに論じるつもりで、二ページほど、スペースを貰つてゐたが、ボケ茄子を相手に論難してみてもはじまらぬので中止した。

俳句の部門に入會して、官選作家だの權威だのといふやうなことを堂々と雜誌に發表するやうな連中は文學とは何んぞや、川柳とは何んぞやから、もう一度出直す必要があらう。

文學報國會が、日川協の入會に難色を以て臨んだことは正しい。同會の理事長興善郎氏が朝日に書いてゐた「日本文學報國會成立」の一文を熟讀して川柳家はもつと勉强すべしである。

最後に日本文學報國會並びに情報局當局に、お祭騒ぎに寧日のない日川協以外に、日本には眞面目な川柳團體の多數が存在することをこの際申上げて置きたい。

○

▼次號は「兵隊さんへ感謝と慰問」の號としたい。と云つて、兵隊さんのことばかりで埋めるといふ意味ではない。兵隊さんの一番知りたいのは銃後であらう。輝かしい銃後日本の朗景などを知らしてやることも、二年なり、三年なり、日本の土を踏まない人たちにとつては大きな慰さめになるのではあるまいか

▼八月の猛暑に際し、柳友諸賢の健康を祈る。（路郎生）

麻生路郎著
新川柳評釋
本邦の川柳で一粒選りの名句を蒐め、その一句一句に、不即不離の評釋がしてある。
定價〒 〇・八〇 〇・〇八

石曾根民郎著・麻生路郎序
句集 大空
著者は信州の人。心の底にじつと懷いてゐたものを素直に吐き出したといふ個人句集。
定價〒 一・〇〇 〇・〇八

麻生路郎著・柴谷宰舟畫
累卵の遊び
名句に名評釋がしてあり、類例となる句が澤山蒐めてある漫畫三十二葉挿入。
定價〒 一・〇〇 一・一二

戸田孤篷著・麻生路郎序
柳川二千六百年史
著者一人の創作・詠史川柳の尨大なゆく。
定價〒 〇・九〇 〇・〇八

發行所 堺市出島海岸通二丁一八二 不朽洞 振替大阪三〇三九二番

各地柳壇

いのちある句を創れ

投稿清規▼用紙は原稿用紙▼文字を正確に▼開催月日及場所記入▼締切は毎月廿五日▼投稿先は本社宛

本社七月例會

七月四日　於　御津八幡宮

豫定の如く七月四日夕刻から御津八幡宮に於て七月例會を開催した。警戒警報令中ではあつたが、燈下嚴戒裡に炎暑を忘れての作句三昧に入る。當夜の柳話は「言葉の妙味」と題して、西田艸樂氏が多年研究の藥草の名にもとづき所感を述べられ裨益する點が多かつた。なほ警戒警報を考慮して句會時間を短縮し八時半散會裡に閉會した（幹事）

出席者（順不同）

路郎・鮎美・紫香・翠光・玲之介・かつみ・丹路・帆船・湊万・潮花・寄與史・誠一・稔・水客・雅美・博也・彌生・一也・伊太古・鐘生・幽王・滿潮・嶺泉・默平・綠葉・吐空・豆秋・香林坊・かほる・艸樂・克巳・三司・不二・一笑・栞・形水・アート・葭乃

席題「笹　舟」　滿潮選

笹舟が沈んだとこで兒が歸り　綠葉
笹舟は小さな渦をよけて過ぎ　翠光
笹舟も栄英になる舟がなし　寄與史
繰橋の下笹舟に渦が舞ひ　鮎美
かなむいたまゝで笹舟流れて來　翠光
追ひついたとこで笹舟沈みかけ　鐘生
笹舟へ看護婦さんの顔が寄り　水客
笹舟は自爆といつた型で過ぎ　一也
朝露に笹舟氣持ちよくはしり　同
笹舟へ夕の風は强かりき　翠光
笹舟は虹が出てゐる野を曲り　水客
子等の拍手笹舟渦を越え　鐘生
笹舟の一つ夕陽を着てしづみ　潮花
童心を乘せて笹舟海に入る　玲之介
笹舟が夜の花火へういてくる　彌生
笹舟に目富の群がサット散り　雅美
笹舟よ勝てゝ遺兒の舟よ勝て　寄與史

兼題「海」　かほる選

はるゝと海を渡つていゝ便り　一笑
生ビール海の向ふを思ひつゝ　同
暮れかゝる早さを見せる海の色　三司
波立ちて人多くなる夏の海　二郎坊
月の海子を抱く妻の若くして　吐空
海が見える方と未座を氣にもせず　默平
海へ母來たは着物を番する氣　同
良いと云ふ病院に來て海を見る　帆船
朝の宿海の碧さをながめて居　紫香
海からの風が二人を默らせる　水客
此の夏も泳げる海よ有難う　博也
洋裝がうれしい日なり海に居り　玲之介

兼題「算　盤」　路郎選

算盤の通りになつた子澤山　鮎美
算盤を間違つた子は爪を嚙み　操
算盤へ千圓位ひバチと入れ　治男
その昔算盤持つて追つて來た　紀川
投藥口中でそろばん彈いてゐ　同
締切日算盤の音ばかりなり　駿二
算盤の玉には乘らぬ特許櫂　豆秋
轉業をしてそろばんにカビが生え　同
御破算で願つたとこへうどん來る　不二
猫撞の立つ算盤がまた違ひ　艸樂
算盤が一つ兄弟皆使ひ　フサ子
店番の算盤はぢく音低く　同
算盤へ米屋は縻の手を拭かず　治男
割切れたまでは算盤よく動き　鮎美
どうしても一算合はず飯にする　綠葉
停年へ算盤だけは貢けぬなり　同
五ッ玉もう古いよと見た云はれ　同
結着と云ふ算盤に奥があり　默平
算盤へ昔の夢を忘れ兼ね　翠光
萬の付く金算盤を二度はじき　滿潮
僅つて居ぬ算盤をのぞきに來　潮花
國策へ算盤を捨てハンマー取り　誠一
二二が十と算盤出てくれず　紫香
算盤は庫まで置いてけちくさし　一笑
番頭が一人算盤する老舗　紫香
算盤が玩具がはりの船堤の子　雅美
目の前で一桁はねる世辭を持ち　嶺泉
意地づくを算盤づくが持て餘し　鐘生
割算になつて算盤行き詰り　翠光
算盤をはじく委が父に似る　水客
良緣もなく算盤の上手な娘　寄與史
そろばんで置かねばならぬ大戰果　幽王
算盤が拙くて彼は出世をし　誠一
學士との算盤如きをもて餘し　伊太古
算盤の要らぬ商業道となり　水客
過小評價は算盤の桁違ひ　默平
算盤をかゝへてジャバへ行つて來か　一也
算盤が合ふと常會終ひなり　彌生
算盤のほかで付合ふ仲のよさ　雅美
赤字ではない算盤であるけれど　潮花
算盤の桁が大きい軍需株　香林坊
算盤に先づ貯蓄額入れてから　昌坊
算盤の動かなくなる夏休み　同
算盤の嵩へ算盤取りにやり　二郎坊
献金の嵩へ算盤取りにやり　かつみ
一算へ二人並んだ女事務　紫香
算盤で肩叩いてる畫休み　博也
算盤も實屋が持つとすごく見え　玲之介
算盤でなぐつて會社やめにする　綠葉

川雜　堺支部句會（堺）

六月二十四日　於　大安寺　角堂報

勝ち拔いて灯の暗さにも馴れて來る　かほる
追ひ討ちの味を知らない中國兵　波夢造
勝ち拔いてゴムの道路に鋼の砲　英二
勝つて勝つて勝つて傲らぬ日本軍　波夢造
日本語でもう冗談も云へる捕虜　同
愛妻へ約束通り捕虜になり　角堂
投降は皆萬歲の委にて　英二
別々に捕虜は煙草を喫うて立ち　かほる
明かに口笛吹いて捕虜通り　昌坊
顔馴染解た／＼で捕虜になり　角堂

七月十二日　於　松虫別館

驛前のうどんを啜る貨浴衣　波夢造
貨浴衣もう町の名もチト覺え　英二
貨浴衣皆た脫せる暑さなり　貴志子
貨浴衣　着るがはやいか肩をぬぎ　葭乃
貨浴衣足四五寸も出る息子　同
ユキタケもそれ／＼に合ふ貨浴衣　英二
貨浴衣女中キッチリ數へてる　昌坊
後紐に一寸はしやいだ貨浴衣　波夢造
貨浴衣此儘歸つて見たくなり　角堂

會計の幹事浴衣の儘殘りすぐ闘る客とは見えぬ貸浴衣貸浴衣なつてもしてる腕時計御民我敵へ覗かす隙もなし親子でも發つ子の行方聞きもせず下女スパイ隣のお染すつぱぬきうま／＼と逆防諜の布哇戰第五列ひそかに白旗用意する遭難の報にスパイもハッとするスパイだつたそをな貸家となつてる

波夢造　路郎　同　貴志子　英二　角堂　儀助　波夢造　同　路郎

川雑　**梅田支部句會**（大阪）　鮎美報

子が出來て朝顔の蔓伸びたまゝ　清子
朝顔だけ寄麗に咲いた休閑地　三郎
朝顔のつぼみ隣の子に取られ　治一
常會で朝顔もらふ事になり　鐵太郎
街道の朝顔バスの埃あび　三司
朝顔へラヂオ體操の影が伸び　由布
朝顔へしやがむ女の戀ごゝろ　秀峰
朝顔はくわへ楊子にのぞかれる　吐空
朝顔のつぼみ行水からかそへ　紀川
朝顔は水鐵砲にゆれてゐる　同
朝顔と起きて冒病を忘れてゐ　靜波
小使の自慢朝顔伸びてゐる　綠葉
休閑地母朝顔も植ゑと云ひ　一也
榮轉の朝に朝顔咲きほこり　鳴玉
丹精の朝顔明日は咲くらしく　行春
朝顔へ鑑がきてゐる畫さがり　鮎美
朝顔へラジオはさけぶ一二三　方眼
朝顔のその日に惜しい色で咲き　治男
朝顔が二階の部屋まで覗いたり　行春
朝顔の垣根に蜘蛛の子が產れ　鮎美
庭先きは朝顔だけの官舍なり　紀川
越境の朝顔ほめる共稼ぎ　秀峰
朝顔は裏の貸家にひとり咲き　喜一
朝刊も見ず朝顔へ水をやり　方眼

踏切の朝顔柵を一つ卷き　紫香

川雑　**尼崎支部句會**（尼崎）

六月二十一日　於昭和莊　美知夫報

農繁期女教師も紺絣　正二
奉仕隊お嫁に欲しい粒ぞろひ　利一
子供には子の役が付く農繁期　害與史
休暇もろて昔にかへる農繁期　加久榮
農繁期日燒けた顏で妻歸り　八櫻
農繁期茶粥すするも立つたまま　正路
農繁期宿題おほ目に見てもらい　同
長男は嫁と姑に愛を分け　利一
長男が父の着物で老けてゐる　正二
小學校だけで長男終るなり　害與史
長男へあてのはずれた遺言狀　加久榮

川雑　**廣島支部句會**（廣島）

六月二十六日　久米雄報

先手して敵の作戰封じられ　可學
先生は馬耳東風でゐる綽名　月浦
進擊の道英米兵の逃げた道　正晴
滿員車掛けてる友に荷を預け　同
婆さんがかき分けて出る滿員車　演章子
作戰の成果に敵も目をみはり　美禰坊
貢けぬ氣で女車掌の甲斐〳〵し　同
幼稚園服をぬがすと砂が落ち　俗善醫
滿員のカーブへ貢けぬ女事務　士農夫
作戰へみんな死ぬ氣の顏が寄り　同
作戰の東に打つた石も利き　幽香里
滿員へ割込む肩を斜に入れ　同
紙芝居の音だと氣づく幼稚園　久米雄
幼稚園みんな歸つた廣さなり　同

川雑　**下關支部句會**（下關）　半休報

窮鼠を詫びて其席顏を出し　苦笑
日本へ窮鼠を見せぬ氣のゲリラ　米三

野天風呂浮かんだ月を掬うて見　余志雄
湯加減を指先で見る貢ひ風呂　哲志
特配の知らせ風呂から有難う　市多樓
長風呂へ子等來客をつげに來る　半休
昨日とはお世辭をかへて貢ひ風呂　九呂平
立志傳百姓らしい親を連れ　米三
百姓の父あり季節忘れ兼ね　鯛好坊
大家族衣料切符が汚れてる　半休
虫の聲涼しき默禱夜の幸　三岳
默禱へ自爆の姿浮いて來る　鯛好坊
一億の默禱告げる鐘が鳴る　潮流
子供等の寢呼吸が揃ふ夜の幸　不川
此上が箱根八里の窓を閉め　井蛙
トンネルの間讀書の眼を休め　麻路
胸躍るままトンネルの試運轉　波人
盲目の兵にトンネルだとわかり　同
宿題を父子で解いた夜の茶の間　同
太陽と共に軍艦旗がのぼり　九呂平
トンネルの此處らあたりが國境　同

川雑　**四ツ橋支部句會**（大阪）　翠芳報

晩酌の父はニュースにあらたまり　綠雨
商船を目當に來てるゲリラ戰　同
見物のプランに入れる新開地　茶目坊
新開地未を見越して湯屋も出來　秀甫
新開地防空壕の家が建ち　同
新開地赤い瓦をさして云ふ　翠溪
新開地醫者も一緒に連れて行く　青雲
新開地貸家を探す若夫婦　いづみ
新開地坪何圓と札が立ち　夢想
よく喋べる外交員と新開地　美奈子
名物の由來を聞いて買うて去に　翠芳
名物に丸公の札附いてゐる　防風
名物の浪花おこしも影ひそめ　山人
甘黨が探す名物見つからず　夢想
名物の味もおちたと一人旅　美奈子

名物も削々からの豫約也　同
名物も一人に一個しか賣らず　翠芳
名物の土產を圍む留守居組　翠溪

五月十二日　星田吟行

學童の手に載せられた雨蛙　翠芳
雨蛙早く鬪れと鳴いてゐる　秀甫
濡れて行く人を急かせる雨蛙　芦穗
傘借りに後戻りさす雨蛙　かほる
窮虫が思はぬとこで手柄たて　香山
窮虫も兵隊さんになると云ひ　土州
窮虫を相手にしてる不申麥なさ　青雲
先生に告げに窮虫走るなり　綠雨
免粃票軍人樣だなと思ひ　白峯

川雑　**三池染料支部句會**（大牟田）

七月二日　蝶人報

洋服を着た神主を御見それし　十四之
神主の禮儀は神代からのもの　天風
豐作を神主樣が引受ける　龜水
お金ならたんまりあるがキップ制　子盛
連敗へ信用おちた弗相場　路村
錢金ですむことならと痰呵きる　染香
釣錢が洗濯板へ押し揉れ　炭山
債券のたしに十錢日掛する　一葉
內輪揉め經濟思想が喰違ひ　抱邊
立替へた金が氣になる忘備欄　天風
選擧費を借つて當選するつもり　抱邊
旅烏もう前借を踏倒し　須惠夫
心臟の弱さへやめた集金屋　平人
くたびれた心臟と知る聽診器　十四之
心臟へどんとこたへた急降下　天風
猫の手も借りたい村をハイカ行く　國夫
貯金塾可愛い御手のとゞくとこ　龜水
タイプ打つあの手一家を支へて居　子盛
感無量ジット見入つた恩賜の手　迂咀
背丈では屆かぬ苦の柵の菓子　道夫
泣く度に子供の熱を觸つてみ　抱邊

祈禱者のしぐさ狂人ぢみてゐる　藤樓
狂人の度胸で止めた急行車　子盛
狂人と悪口される程の熱　世志一
歩いてはならぬ狂人せまく生き　抱逸
道楽が過ぎて狂人沙汰となり　天風
突然に笑ひ出されて寒氣立ち　路村
印度から夜通し來たような父の顔　坂本
手袋のまゝ敬禮の飛行服　龜水
御通過へ艦上遙か舉手の禮　國夫
敬禮も日本式に比島人　一葉
自爆する僚機へ敬禮して送り　天風
敬禮に少しあわてゝゐる和服　國夫

川雑　**松江支部句會**（松江）
七月四日　於　龍人居　將雄報

常會へ簡單服の二三人　龍人
簡單服の列が並んだ配給所　祥月
のれんから透かして見える金魚鉢　將雄
頭から先に割り込む繩のれん　榮兒
アッツ島もう日章旗軍艦旗　莞路
湖で知られ觀光都市とされ　還兒
湖の雑魚にせわしく日が落ちる　龍人
峠まで送つて貰ふ入營日　榮兒
峠茶屋今日はわらぢが賣り切れる　將雄
曲馬團舊體制のものをする　叮紅
時局柄鳴りをひそめた曲馬團　淞南
固練が鼻の筋だけ曲馬團　莞路
提灯が動いて波の高さ知る　還兒
强情の背を向けたまゝ煙草の輪　將雄
强情を張るかと繰はようしやせず　祥月
强情な子が先生と離れて來　叮紅

川雑　**小郡支部句會**（山口縣）
六月十五日　井蛙報

玄關に水撒いてあり夏の朝　凡骨
朝雲を衝いて荒鷲無事歸還　一生
滑飲を下げて朝刊全部讀み　曉霧
朝の野良しかし雲雀が先だつた　井蛙
物尺が南へとゞく地圖の上　多吾作
東亞戰起きて南がわかつて來　遊揚
勝いくさ赤道線を越えて行き　柳坡
海鷲は南狹しと北へ飛び　浩
南もうハナハトマメの語をおぼえ　九呂平
南進論叫んだ頃は過去となり　凡骨
行軍の靴擦れ休んでから氣づき　曉霧
國策の靴梅雨期が暇となり　浩
出迎えの子を差上げる靴のまゝ　九呂平
一年生靴はまだかと今朝も言ひ　いさを
昂奮を抑えて靴の紐を締め　井蛙
五百點殘しモンペで娘は嫁ぎ　城東
祖母さんの切符もまじる背廣服　茶目坊
いゝ柄へ値段と點數折合はず　多吾作
產聲に父は安心して覗き　城東
產聲は先づ國策のお手柄だ　喜樂
產聲へ小さくもめる子供部屋　井蛙

川雑　**神津支部句會**（大阪）
六月十三日　於　乙平居　香林坊報

別莊に主の知らぬ花が咲き　都倉
モガとモボ別莊前で立ち止り　雁木
別莊で去年の蜘蛛の巣を拂ひ　伊太古
植木屋の古手別莊番で生き　同
道具賣うやうに別莊一つふえ　若榮女
偏屈が仲にはいつて亀がつき　風情
別莊が出來ても然が一つ增え　嶺泉
偏屈の堅さ買はれて婿養子　風情
偏屈が祟り我が腕姿婆に出ず　若榮女
偏屈と云はれ大望仕遂げたり　同
偏屈の板塀が腕の冴えを見せ　乙平
惜まれて去る偏屈の老課長　嶺泉
偏屈へ妻はい〳〵と貢けて濟み　林笑
蚊帳吊つて裏も表も開けて寢る　一夢
蚊帳吊つた中の一匹殺して寢　林笑
彈丸なんか恐くはないが蚊帳かむり　青洞
一匹の蚊に蚊帳の中みな立てり　乙平
夕月のやうに離れの蚊帳が見え　若榮女
新婚の蚊帳は嬉しく二人吊り　風情
子澤山一人で蚊帳に寢て見たい　湖心
うたゝねへ母默々と蚊帳を吊り　香林坊
風鈴の動きへ蚊帳の裾が搖れ　同

七月二日　於　乙平居

あらだきで出されて知つた鯛の味　茶堂
共稼ぎ夕餉の鯖も鯛の味　嶺泉
鯛網へ雑魚もお供かかゝつてる　湖心
榮轉へ鯛の目玉を先づつゝき　同
釣自慢鯛の太さを記錄する　乙平
頭付き鯛の代りを鰺でゆき　伊太古
二の膳の鯛見ただけで折に入る　同

松坂倶樂部川柳會（大阪）
六月二十一日　白面人報

共稼今朝も當番逃げてゐる　伊太古
共稼ロマンスあつた果と云ふ　博也
共稼はつくりおやぢ丈が死に　生々庵
共稼ぎ妻のおなかゞ氣にかゝり　同
共稼ぎの窓に鉢植枯れてゐる　美根子
共稼女時々遊んで來　白面人
共稼ぎ妻の昇給氣にかゝり　生々庵
共稼二人でつゝく鮭の味　伊太古
子が出來るまでを張切る共稼　博也
共稼の時を忘れて二號置き　聖司
共稼ぎもう止めていゝ齡になり　湖心
姑が遠慮してゐる共稼　白面人
共稼細々乍ら煙立て　伊太古
共稼ぎを母はことさらいとしがり　美根子
裏門で待つてゝ歸る共稼　恒明
共稼女も飲ける口になり　白面人
共稼揃つて鍬を振る委　博也
共稼ぎ會社のぐちを聞いてやり　恒明
共稼ぎまだ〳〵遺すつもりらし　湖心
それ〴〵の友が訪ねる共稼ぎ　美奈子
月給は妻のが上で時に揉め　白面人
共稼同じ休みの日を印し　生々庵
靴下を見られてしまう應接間　香林坊
靴下は三歩歩いてもう破れ　伊太古
靴下の穴が氣になる通夜の席　生々庵
靴下の破れわびしい母なき子　正太郎
靴下の穴が氣になる作法室　美奈子
靴下が要らない夏で僕は好き　博也
靴下を脱ぎ早速の休閑地　同
元氣すぎまして靴下つぎだらけ　恒明

非特異性全免疫元
オムニコトメット
本劑は非特異免疫學說に準據して高度の免疫力を有する異種蛋白、リポイド及び脂肪を主体とせるものなり。
（適應症抜粋）
流感、各種肺炎、肋（膜）膜炎、扁桃腺炎、中耳炎、蓄膿症、其他各科、急性、慢性、炎衝性、傳染性、敗血性、並に化膿性諸疾患に對し廣汎に渉り著効を奏す。
（特長）
注射無痛、副作用絶無、用法簡單、奏効迅速、價格至廉。
（包装）
二cc流管入　二cc一〇管入
二cc裏管入　二cc一〇〇管入
一cc一〇管入　一cc裏管入
一文獻圖呈一
發賣元　株式會社黒田藥品商會
大阪・東京

靴下を持込んでゐる終ひ風呂　同
靴下の小言は言はず黒ときめ　湖心
靴下のたるみに女氣がつかず　白面人
よく見れば女靴下履いてゐた　同
僅かでも税金掛ける身となつた　伊太古
十六の妓が税金をかけてゐる　同
十割の税金などにたじろがず　乙平
市民税引越先まで追手來る　同
税金と酒に幹事も悩まされ　生々庵
税金で云へば大した出世振り　正太郎
税金に追はれてもやる家業なり　同
靴下の破れ獨身税をかけ　美奈子
サア結婚をせよと税金差引かれ　同
搾げる子なく納税高で御奉公　同
働いた手で税金を差出しぬ　同
泣かされる涙も觀覽税の中　博也
不具の身へ獨身税がつらく來る　同
税金が二割のとこでやめてをこ　恒明
所得税まだ云ふて來ぬ子澤山　湖心
税金へ眼を三角にして儲け　香林坊
税金は何んぼでも出す國訛　同
増税をしても廓の灯はあかし　聖司

有恒倶樂部川柳會（大阪）

鋭々報

六月二十六日

花嫁のあらを少々見てかへり　波夢造
花嫁の小さい胸へ叱り過ぎ　同
花嫁を見てゐる娘なぶられる　同
花嫁の袋をながめ母の泣く　平三
花嫁となつたわが娘に見とれて居　路郎
言ひにくい事は子供をそばへ置き　至藝瑠
御きげんなゝめ也子供知つてゐる　同
子供もう脊中の幅へ大き過ぎ　波夢造
いつまでも子供でないに氣がつかず　同
運轉手の怒號を後に親を逐ひ　同
丸出しの大阪辯もわが子なり　萬雷
鐵棒のマメの子の擊のたのもしき　同
子供でもないと氣がつく嫁話し　行人
子ぼんのうつひに一暮見ずに濟み　鋭々
俺のとこにこんなに壁があつたのか　至藝瑠
壁一杯の大ポスターが見逃がされ　波夢造
荒壁のまゝで正月するもよし　同
洋室の壁で夫人と技師と揉め　同
べつとりの壁にやもりの午後三時　萬雷
わが影が壁に家路を急いでる　同

七月九日

獨身とあつて女に見直され　鋭々
孤獨感の中で聖人微笑する　同
松竹座獨身らしい人と人　青美
決死隊みな獨身のきおひ也　同
獨身を女に知らすおせつかい　萬雷
獨身の役と心得引受ける　同
獨身へすまない話はずみ過ぎ　同
ネクタイが父より高い獨り者　路郎
獨り者上衣は持つて歩くだけ　同
歸つても獨りですよとビヤホール　同
獨り者洗濯デーもあるの也　同
脱帽の汗を拭くまもなかりけり　同
脱帽へ祖國の遠さ思はされ　同
帽脱げばツンツルテンのオツサンだ　鋭々
かたちだけ帽子を脱つた禿頭　青美
將軍は寫標へしばし帽をとり　同
脱帽とどなる畫面は兵が征く　萬雷
婦人帽日本人なら脱ぎなさい　同
脱帽は遲刻したのを慌てさせ　路郎
脱帽さ禿げてゐやうがあよまいが　同

遞信病院大阪 聯合川柳會（大阪）

六月廿五日　於　遞信病院會場

陳情の車中週報讀む村議　春巢
日焼けした腕が自慢の村議來る　政治
増産へ議員理外の理をさとし　喜由
戀を割く役も村議は頼まれる　同
一角の政治家氣取る村議なり　筑川
丸島利生氏の村議當選を祝して　同
元島司村議となつて翼賛す　同
勳八等の村議旅順の生殘り　沒食子
地車の事で村議が二派となる　同
推薦の村議は一期勤める氣　春巢
今日からは村議うるさい事も増え　正甫
この齡の村議も母をよろこばせ　同
振出しは村議でしたと時の人　柳秀
村議なる名刺百枚程は刷り　同
學校で幅をきかすは村議の子　路生
賛成の外は云へない村議なり　同
村議にも一言居士のあつてよし　路郎
異議なし異議なしで村會終るなり　同
村豫算熊手の樣な指で操り　同

ミツドウエー島强襲

まき餌とも知らず米艦よつて來る　同
衣料切符使はぬものでお禮をし　卓二
再會を煙突の裏ときめて置き　一驅
夏近し煙突掃除頼まれる　晴天

遞信病院の煙突を見て

病舍より煙突の方に金を費れ　大佛
煙突に戰傷のある御用船　山彦
煙突のデモは昔のことなりき　正甫
タイル張りの煙突雨を待つやうだ　方正
煙突の數も敎へる天主閣　利生
伊達でない長い煙突美學など　孤篷
煙突の力を頼む大東亞　政治
煙突の下屯ろし易し　栗
煙突の蔭に咲いたる戀なりし　同
轉業へ煙突長い影を引き　喜由
病める窓へ煙突たゞ黒し　同
白煙上げる煙突よく見える　竹莊
大阪の煙が見える山に居る　同
煙突の先から大阪暮れて行き　青一路
煙突へ社長一瞥くれて去に　同
あの煙突が俺らが工場さ　同
復興の力煙突見上げたり　沒食子
煙突は昔のまゝで儲けて居　同
ジャバ便りもう煙突が煙を吐き　同
黒字だと煙突云はぬばかりなり　同
煙突も石炭の來る日を待てり　春巢
石炭かないを煙突知つてゐる　同
風呂たいてゐる煙突を羨まれ　同
煙突を見上げた軍需工退ける　同
ドアーマン煙突の如くつッ立てり　路生
俺の氣持煙の出ない煙突か　同
煙突かあつて油絵らしくなり　同
煙突が見え省線はカーブする　同
東洋一といふ煙突へ勤めて居　路郎
この村はこの煙突に養はれ　同
社宅から見る煙突の頼しく　同

警察病院川柳會

七月十四日　於　五柳氏宅

正柳報

一周年句會（大阪）

還足に先生だけが草臥れる　浩
御座なりに勞ねぎらはれ腹が立ち　余城
草臥れたズボンが今日の思出よ　好平
丸坊主草臥れ知らぬ執務ぶり　柳一
神經も疲れてますと患者いふ　湧三
たゞひとり踊れて死を選び　同
生活の疲れもあらうに楚々として　余城
草臥れた夫婦無口で膳につき　道朗
鍊成へ丙種聊か疲れたり　湧三
養老院草臥れ果てた顔ばかり　文龍
うたゝねへきのふの疲れ誰かしろ　湧三
保險屋は草臥れたやうに又歩き　柳峯
仰山に疲れてみせる甘えやう　好平
草臥れた水引しまふ御部屋はん　正朗
筆先で安心させる術をしり　道朗
一年生筆の軸まで墨をつけ　柳峯
先生と同じ筆なりさりながら　五柳
筆とるが早いか達磨出來上り　余城
正常の頭で讀めぬ御筆先　久郎

惡筆は大隈さんを例に引き　道朗
履歴書を書くとき持つたゞけの筆　柳一
墨痕淋漓三人もゐてよめませぬ　湧三
結構と云へど代筆物足らず　雨聲
惡筆を知つてる癖に頼みに來　浩
筆先でどうでもなるがとおどしつけ　雨聲
辭職願ひ書いて興奮まださめず　柳峯
筆の尻ひたひに當てる大晦日　一艸
好い筆がありませんがと書かされる　正朗
内祝書くにさばさの新を出し　同

病院風景（九句）

檢診へ南方志願の巡査もゐ　湧三
胸章をつけて院長若く立ち　青柳
輸送車を押してサーベルついてゆく　湧三
小兒科へ私服で藥取りに來る　吉郎
いたづけば威嚴の髭も寂しけれ　青柳
肺病じやないよと云へば擧手の禮　湧三
小兒科か内科か迷ふ十五六　五柳
受付はヒ科かシ科かと問ひ正し　文龍
回診を前に女醫さん化粧する　青柳
警官の浴衣になつて親しまれ　正朗
ワンピース浴衣の生地もまたよろし　正柳
特配の浴衣あります列をなす　一艸
浴衣がけ深水ぱりの委なり　吉郎
着る浴衣同じ宿屋の客と知り　同
出産に母の浴衣がほどかれる　文龍
常會にかみしも張りの浴衣來る　同
晩酌へ浴衣を半分脱いでゐる　青柳
南方へ心づくしの浴衣着く　文龍
浴衣だけ揃へて女中遠慮をし　吉郎
風鈴へ立つた浴衣の腰細く　湧三
日本の味はこれだと浴衣ゐる　同
ブラリつと夫婦浴衣の睦じさ　雨聲
貸浴衣髭や頭で區別する　五柳
貸浴衣着ても幹事はすぐ知られ　同
浴衣着た姑は子供を寄せつけず　正朗
汐風を浴衣いつぱい受けて立ち　浩
占領地浴衣の人がもう歩き　余城
考へをかへて浴衣を脱ぐとしよう　雨聲
浴衣着の感觸も亦御民われ　正柳
貸浴衣翻の方から下りて來る　路郎
純綿の浴衣といふがはげちよろけ　同
泊まらずに歸る浴衣は丸められ　同
先着は浴衣となつて見おろしぬ　同

五月十二日

順番が來たとき主演代理とは　文龍
すべり臺番破られて泣いて來る　五郎
この次と思つたに「お顔」先へ行く　同
手續の不備で順番又明日へ　雨聲
順番が來てあッさりと斷られ　正柳
あゝ曲りこう曲つてから俺の順　同
順番ですとの一言取りつけず　久郎
順番だ文句はないと尻目で見　雨聲
順番ですと隣組長させられる　柳一
來た順に常會の下駄揃へられ　正朗
もう終ひだつせと順番うらめしい　吉郎
傳言を頼んだ方が忘れて居　余城
傳言の言ひ違ひから親が來る　文龍
傳言に來てそのまんま話し込み　正朗
傳言へちとつけたして喜こばせ　雨聲
心臟の強さ傳言板も知り　湧三
傳言は自轉車に乘つた儒で云ひ　青柳
傳言を正直に云ふ若さです　吉郎
傳言を頼まれ下戸は歸される　浩
傳言にしばられ次へ行けもせず　道朗
遲くなる傳言云つてヒられる　五郎
弟は氣易く傳言引受ける　正柳
また聞きの傳言たん〳〵筋にそれ　晴夫
トーキーの呼吸風に似てせはし　正柳
呼吸はづませて云ふは第二の便なり　柳峯
人工呼吸婆婆に戻れと云ふ如し　正柳
叱られて小供は少さく呼吸してる　浩
も少しの呼吸ですよと敎せもせず　道朗
敵機も亦八日の日を選んで來　正朗
カフェーの女給に宿の格を聞き　雨聲
常宿の福神射的場知つて居り　五郎
驛前のホテルだつかと運轉手　吉郎
旅馴れず驛前に宿をとり　余城
大官の宿金筋にサーベルに　道朗
安ホテル風呂は向ひの湯屋にあり　青柳
宿の朝大阪辯の威勢よく　湧三
その朝の新聞さけて宿を立ち　同
ホテルに居て自分の記事に讀みふけり　正朗
内湯あり鐵砲風呂とは書いてなし　青柳
方言も覺えて宿に永くなり　五郎

徐州川柳會（徐州）

六月二一日　於津浦ホテル　ひろし報

足らぬもの足しあつて行く　隣組　多々良
嫌はれてゐる一軒も隣り組　雨町
隣組それぞれ癖のある理窟　ひろし
支那街に離ればなれて隣組　八筋樓
麥飯のうまさを兵舍から便り　雨町
女手で今年も麥の秋が出來　鶴城
麥を刈る恩賜の鎌手に意氣をこめ　玉人
葦平は麥と徐州を結び付け　雲亭
望樓の歩哨はるかに麥の波　玉人

前號大和篇の正誤

四頁三段二七行目の『あすが鍋大和三山閉切つて』の句主は路郎

新發賣
消炎鎮痛濕布藥
粉末エキホス
主治効能　感冒、肺炎、肋膜炎
氣管支炎、扁桃腺炎、中耳炎
ロイマチス、神經痛、打撲痛
捻挫等
今般エキホス姉妹品として發賣したる本劑は專らその藥効並に持續時間の永續に留意して製造せるものにして用法も至極簡便、安全なる粉末濕布藥なり
一、本劑は長時間使用出來るやうに工夫してありますから持續時間は任意にして支差へありません
包裝
一〇〇瓦
二五〇瓦
五〇〇瓦
一瓩
エキホス姉妹品
C-PEJ9

社關係の人々

主幹

麻生路郎

賛助員

池澤樂居　長谷川一徹　大道弘雄　岡本一平　片岡直方　笠原路生　嘉納純　田中辰二　長崎柳秀　長岡半太郎　長野暗濱　藤村作　藤本卯之助　顕原退蔵　浅田一　末弘巖太郎

客員

島山一歩　沖野岩三郎　大島濤明　大谷五花村　鶴井晨修　川村花菱　米村あん馬　田村孝之介　谷脇素文　高尾亮雄　生方敏郎　窪田銀波樓　山本雨迷　安川久留美　前田五健　柴谷宰二郎　篠原春雨　蛭子省二　藤里好古　森東魚

不朽洞會員

橋本緑雨　高橋かほる　福田山雨樓　西田艸樂　永田里十九　奥村丹路　岩崎柳路　寺井鋭々　大西八歩　高澤一浪　戸田孤篷　石井白面人　川出美根子　中島生々庵　戸倉曽天　古川風竹　前山北海　古川麗花麗　岩崎山石　藤井友郎　米本貴志子　内藤草一郎　三輪晩翠　水谷鮎美　大坂形水　田中雨月　平佐平三　橋本波夢造　藤岡至藝瑠　西川清美　米本儀助　吉田萬雷

★

村松夢裡　市場沒食子　吉田水車　妹尾八九滿　須崎豆秋　宮岡白峰　石曾根民郎　中西おさむ　原史風　正本水客　黒川紫香　丸尾潮花　岩橋双虎　岡田某人　岩崎松代　酒井斗風　北川春巣　布施筑川　尾崎方正　佐竹香附子　押谷たけを　櫻川不水　西尾栗　關根山彦　田中風葉　中原銑人　濱田久米雄　好崎申仙　杉原大研子　菊澤小松園　魚住滿潮　清水友帆　清水史路　清水白柳子　小畑自有浪　西川愁水　中内翠芳　多田市多樓　濱田賢次　大森風來子　鈴木九坡　逸見灯竿　石原伯峯　植山九天　夷一笑　鈴木石鹿　月原宵明　高田抱逸　篠山籌彦　國弘半休　岩崎水虹　阿萬萬的　谷川緑風　小林文月　酒井美知夫　飯尾寄與史　小川恒明　野口柳太　浪玲之介　河野夜王　德永雅美　谷口緑葉　武部香林坊　上田一翠　河井上湧三　八竹正柳　明石柳次　水谷竹莊　長野井蛙　村上角堂　福井哲　松浦帆船

支部と幹事

道頓堀支部（大阪）萬よし
函館支部（函館）晨修
梅田支部（大阪）鮎美
嬢川支部（島根）緑之助
鳥取支部（鳥取）鐵州
松山支部（松山）耕一路
天王寺支部（大阪）八九滿
鶴町支部（大阪）双虎
御池橋支部（大阪）夢裡
松江支部（松江）將雄
大鷲島支部（大阪）柳太
西條支部（愛媛）英賀夫
城南支部（大阪）申仙
今治支部（今治）文庫
川雅光笑會（大阪）里十九
竹原支部（廣島）芳郎
廣島支部（廣島）久米雄
豐中支部（豐中）紫香
下關支部（下關）牟休
北鮮支部（羅津府）美笑
蒙彊支部（張家口）柳路
上海支部（中華）天作
鐵道病院支部（大阪）春巣
神津支部（大阪）香林坊
渚支部（大阪）湊万
四ッ橋支部（大阪）翠芳
布哇支部（布哇）麗花麗
堺支部（堺）角堂
岡山支部（岡山）九坡
尼崎支部（尼崎）美知夫
日和佐支部（德島縣）賢次
三池染料支部（大牟田）蝶人
大洲支部（愛媛縣）椋影
小郡支部（山口縣）井蛙
熊本支部（熊本）水源
仁多支部（島根縣）一聲
津山支部（津山）一將

募集

第十九卷 第十號課題

八月廿日締切（十句以内）

公用　福田山雨樓選
友情　水谷鮎美選

第十九卷 第十一號課題

九月廿日締切（十句以内）

素足　前田五健選
日記　魚住滿潮選

第十九卷 第十二號課題

十月廿日締切（十句以内）

新刊　石井白面人選
繃帶　尾崎方正選

毎號募集（毎月五日締切）

近作柳樽（雜吟廿句）　麻生路郎選
川柳塔　麻生路郎選
同舟近詠
各地柳壇（會報）
文章（評論研究感想吟行漫文漫畫）

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の原稿紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る
▲「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。
▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事。
▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。
▲書體はなるべく楷書（川柳雜誌原稿）と封筒に朱記の事。
▲締切は嚴守されたし。
▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

規格判B列5號

川柳雜誌 第十九卷第八號

毎月一回一日發行

定價

一冊　金三〇錢（送料一錢）
半ケ年・六冊　金一圓八十錢（送料六錢）
一ケ年・十二冊　金三圓六十錢（送料十二錢）

外國送本には海外郵送料實費の加算を乞ふ。

御註文はすべて前金で願ひます。振替（大阪七五〇五〇）又は小爲替を御利用願ひます。御註文は何月號よりと御指示願ります。轉居又は改號等の節は最新併記の事。

昭和十七年七月廿五日印刷
昭和十七年八月一日發行

禁無斷轉載　本誌の刊行は有保證新聞紙法に據る

廣告　本誌廣告に御用の節は川柳雜誌社廣告部へ御一報下さいますやう。

日本出版文化協會會員番號　五八〇四壹

發行所　川柳雜誌社
大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地（昭和ビル）
振替（大阪七五〇五〇）

編輯兼發行印刷人　麻生幸二郎
大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地
電話土佐堀　三三三三番　八八一六四四番

東京市神田區淡路町二丁目九番地
配給元　日本出版配給株式會社

★毎號、戰線の勇士に送られたい方は部隊名をお示しの上本社宛に御申込み下されば郵税を奉仕して直接發送致します。

送住
本所
氏名

ガラス壜代用 紙容器

金屬代用紙罐
紙コップ

丸形・角形・小判形・組立式各種・藥品・食料品・菓子等の容器として最適

大阪市住吉區晴明通一丁目四〇番地
二葉屋商店
電話事務所用 天下茶屋 五八〇二番
工場用 同 五八〇三番 五八〇四番

セミ・ミノルタ

代表的國産カメラ

ブロニー
16枚撮り

II型F4.5付
¥117.00

F3.5付
¥141.00

距離計
¥21.00

(カタログ呈 要郵券十錢)

淺沼商會大阪支店

大阪市南區順慶町四丁目
電話船場905・1905・1396・5095番

東口 スピーザ

ワイシャツ
婦人服地
其の他

大阪市北浜二丁目 片倉ビル
電話北浜(23)六六三六番(4)

安産のために

ワダカルシューム錠

妊娠としての大切な責任はカルシュームを補給して諸病を防ぎ、子宮の收縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

片瀬醫學博士述
「安産のために」冊子呈上

楢林醫學博士
片瀬醫學博士 推奨 監査

大阪道修町 和田卯助商店

SENRYU ZASSHI No・223
Published monthly by the Senryu Zasshisha, Osaka, Nippon.

細菌性・化膿性疾患に

テラポール錠

感冒・扁桃腺炎・中耳炎・尿路疾患・丹毒・肺炎・齒槽膿漏婦人科疾患・面疔・其の他細菌性疾患に

500
THERAPO
TABLETS
丹毒・敗血症・連鎖球菌
テラポール
Each tablet contains 0.3g para-aminobenzolsulfonamid.
DOSE: 1-2 tablets daily thrice or four
MARK
第一製薬株式會社